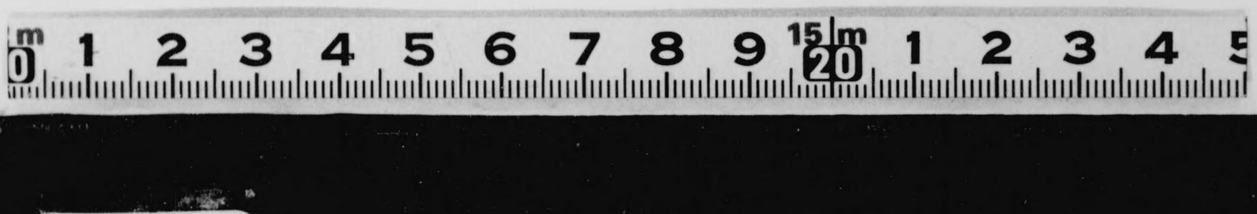
363
106



363-106

帝國圖書館藏

文學士 笹川臨風著

古人に學べ

東亞堂發兌

大正
6. 8. 26
内交

序

此書は別に作らうとして出來たのでない。書物を讀んで記憶してゐたのや、疑はしいのを正して置いたのを、そこはかとなく書き列れて、時々の需に應じ、世に公にした、それを、今又裒めて一册子となしたのである。自分から云ふと讀書から得た樂で、讀む人に取りても些とは益がないでもなからう。事の史傳に傾くのは、著者の史癖が然らしむるのである。

大正丁巳歳孟春

臨風學人識

目次

第一　天地一閑鵠……一
第二　當意卽妙……一〇
第三　牛蒡狩……一九
第四　料理通……二九
第五　鼻毛中納言……三八
第六　餅の靈驗……五三
第七　寒晒の粉……六四
第八　伊勢參り……七二
第九　靜御前……八四

第十　劍法と畫法……九二
第十一　敵討……九七
第十二　成金……一〇二
第十三　竹の杖……一〇六
第十四　男伊達……一一〇
○第十五　俳句の德……一一七
第十六　美人薄命……一二一
第十七　大風呂敷……一二九
第十八　小栗判官……一三四
第十九　鈴木石橋……一三九
第二十　車善七……一四四

第二十一　王子の狐……一四八
第二十二　人物養成……一五二
第二十三　春臺の煎海鼠……一五七
第二十四　豫言……一六一
第二十五　逸話……一六六
第二十六　嬢樣藝術……一七五
第二十七　心中……一八三
第二十八　百濟河成……一九一
第二十九　浪人氣質……一九九
第三十　岡目八目……二〇八
第三十一　英一蝶……二一七

第三十二　奈良茂……二三二
第三十三　左甚五郎……二四八
第三十四　五郎太夫祥瑞……二六三
第三十五　由比正雪……二七八
○第三十六　織田信長……二九二
第三十七　雪舟……三二〇
附錄
高山彦九郎……三五一

目次終

古人に學べ

笹川臨風著

天地一閑鷗

第一　天地一閑鷗

大阪夏の陣に泉州樫井にて淺野の勢と手痛き合戰をして、天晴れ見事の討死をした塙團右衞門直次と云へる勇士は、も と筑前中納言秀秋の家人瀧權右衞門に仕へてゐたが、其後浪人して、時雨左馬助と名乘つて、加藤左馬助嘉明の徒小姓となつた。朝鮮征伐の時には、青絹の眞中に日の丸をつけた指

物を素膚に背板ばかりで指して、善く働いた。此やうな手柄が度重なつて、後には千石取り塙團右衛門と號して鐵砲大將となる。然るに關ヶ原合戰の時に左馬助の差圖に違つたため痛く其機嫌を損ひ、

『汝れは一生涯大將は勤まらぬぞ。』

との大小言。それで團右衛門は憤慨して、伊豫の松山を退轉の時、書院の大床に一句を題して、おさらばをきめた。

遂に江南野水に留まらず、高く飛ぶ天地の一閑鷗

此句を見た左馬助は怒るの怒るまいの、散々の不興の體で、

『怪しからぬ奴。以後他所への奉公は一切成らぬ樣に妨げて遣はす。』

と奉公構ひとなつた。けれども金吾中納言小早川秀秋への奉公は諸大名も文句が云へぬから、團右衛門は此人の許に仕へて、千石取りの鐵砲大將となつたが、秀秋逝去の後は尾張薩摩守松平忠吉の臣下に加はつた。此の人も將軍家康の子であるから、諸大名から文句をつけられぬ。然るに不幸は團右衛門につきまとつて、又此人の逝去に逢つて、浪々の身となつたが、やがて福島左衛門大夫正則の許に奉公して千石取りの馬廻りとなつた。すると果して加藤左馬助から抗議が出て、又もとの浪人。此度は道心ものとなつて、鐵牛と名のり、妙心寺の大龍和尚の會下にゐて、衣鉢の上に刀脇差を差し洛中洛外を托鉢して歩いた。いづれは由緒あるお侍のなれの果と

思ふから諸人の憐愍を受けて、團右衛門入道大分實入がよい
或時のこと、中立賣のさる分限者の處で大龍和尚を初め招
いたが、どうしたことか、鐵牛和尚一向やつてこない。齋が
過ぎてから、によつきり現はれた鐵牛の姿を見るなり、大龍
和尚は、はつたとばかり睨みつけ、
『やあ鐵牛、何とての遲參ぢや、以ての外の白痴ものめが。』
と、百雷が一時に落ちるが如き大罵倒。聞く鐵牛は平氣の平
左で、さら〳〵と筆を走せたと見るまに
『和尚斯うでござる。』
「一鞭遲く到るも肯て怒る勿れ、君は大龍に駕し我は鐵牛。」
どうだとばかり、鼻の先ではせゝら笑ひ。

『むう。』
と、大龍和尚、臍下丹田に息を入れてゐたが、
『面白い、秀句ぢや。』
はたと膝を打つての大機嫌に、座に列なるものどもも、
『見事〳〵。』
『お手柄でござる。』
之は感心、卽座の妙趣向、滿腹の智囊と、どつとばかりに賞
めそやされ、團右衛門入道、齋にありつきながら、
『何い、それ程のものでもござらぬ。』
樫井の合戰が畢んで、前將軍德川家康が首實檢をする。所
が團右衛門の首は眼を見開いてゐるから、本多上野介正純の

計ひとして、暑氣の折節で首腐爛と申しなして實檢に備へぬ。すると其夜井伊掃部頭直孝の陣屋で騒動が起つた。掃部頭が京都から召連れて來た古千屋と云ふ女が急に癪を起して、絶え入つたるを、さま〳〵に介抱すると、ふッと息を吹き出し、

『此身も一手の大將であるのに、何で首を實檢に入れぬぞ。此やうなことでは此度の御軍も勝利は思ひもよらぬ。見よ見よ祟りをなして災をしてくれよう。』

と言ひ罵る。云はせまいとすると、力飽くまで强く、狂ひ踊りて、手のつけやうもない。それを取鎭めようとして、陣中上を下へと騒いだ。

掃部頭の陣屋は家康の本陣と程近いから此騒動が前將軍の

耳に入る。前將軍此旨を聞いて、

『まこと塙直次は隱れもない勇者、殊には一手の指揮をも致したものであれば、今改めて實檢して取らせう。』

との沙汰があつて、即夜首實檢の式を取行ふ。前將軍のうしろには旗本の諸侍綺羅星のやうに居並ぶ。横田甚右衞門と大久保彦左衞門とは具足に太刀佩いて身を固め、首の左右に居流れ、太刀の柄に手をかけて、首を睨んでゐる。井伊掃部頭披露あつて、實檢の式は事なく濟む。やがて掃部頭は陣屋に立戻つて、此旨彼の女に物語ると、女は急に言をかへ、

『前將軍は如何にも名將である。深夜に我が首を實檢ありたるは、死後の思出之に過ぎぬ。あら有難や、辱けなしや、

當家の御勝利は疑ひもござらぬ。』

と云ふかと思へば、其儘すや〳〵と眠つて、あとはけろりと夢の覺めたやう。

其後前將軍は、

『其女は團右衞門と由緣があらう。尋ねて見よ。』

と上意がある。掃部頭はッと心得て、詮議をすると、お話申すも恥かしながらと來た。もと此女は團右衞門と淺からぬ契を結びたるもの、團右衞門討死と聞いて心中に愁傷一方ならずあつたが、團右衞門の首實檢に外れたと知つて、無念やる瀨なく、

『あゝ一手の大將ともなつたあの剛のお方が、あらぬ雜兵どもの首と一つになつて捨てられることか。』

と女心に遺恨の念が取りつめて、遂に狂亂の體となつた。其お蔭で深夜に特別の實檢あつて、女も滿足し、團右衞門の靈も安堵した。鐵牛和尚も是に至ると、多方面と云はねばならぬ。

團右衞門の死骸は樫井町の北端に埋めてあつたを、紀州の家人の小笠原作右衞門と云ふ人が親戚であつたから、塚に五輪の塔を建てた。往來のもの、心ある人は馬乘物から下りて之を拜し、香華も絶えなかつたと云ふことだ。

塙團右衞門は岩見武勇傳に於て一の花役者であつた。其俠義の力は重太郎兄妹を助けて、復讐の本意を達せしめるに於

て與つて大であつたと傳へられてあるが、どこまでが實説か、それとも全然作りごとかは分らぬ。岩見武勇傳を愛讀してゐた少年時代から我等に取りては今に長い古馴染である。

第二　當意卽妙

松平伊豆守信綱は智慧伊豆と稱へられて、德川三代四代將軍の世には拔群の利者であつた。名奉行大岡越前守忠相の當意卽妙の裁判中には間々伊豆守の裁判が混同してゐるやに思はれる。

或浪人の娘、今年十五になるが、父は歿して母親の手に育てられるのがあつた。さる媒介するもの丶云ふには、

『どうぢや、今年十七八歳のさる有德の浪人がござるが、娘御には丁度釣合もよい、嫁におやりなされては。』

と、開いた口に牡丹餅のやうな話。

『不束ではござれど、一人の祕藏娘。よい口があらば遣してもよろしうござります。お話の樣子では年頃もよし、又勝手向きもよいとのことなれば、結構な緣談にござりまする。どうか、お世話なされて下されまし。』

と母は大の乘氣となる。すると程經て媒人が來て云ふやう、

『よく丶聞き合はせますると、聟殿の年頃は三十ばかりとのことでござる。』

『何ぢや、其やうなことでは此間の話とはいかい違ひ故遣り

ますまい。有德との話もどうやら實でないやらも知れませぬ。』

と、母親は不機嫌にて首を振る。

『歳は違つたが、有德なことは毛頭僞りがござらぬ。折角の緣談、嫁の十五に聟の三十は年寄とも申されまい。何とかして此話を纏めて下さらずば、いかい難儀でござる。』

と云つたが、母親いつかな承知をせぬ。媒人は困じ果て、近所のものまで呼び集へてさま〳〵に言葉を費したるに母親もやつと納得し、

『皆樣の御取扱ひもござりますれば娘を遣はしませう。』

と、此に黃道吉日をも定めた。然るにやゝあつて聟の三十も

口違ひで、まことは三十五と聞いて、母親烈火の如く憤り、

『此やうに、次第に年嵩が增すやうでは、どのやうな巧があらうも知れぬ。後家と侮つてであらう。何で可愛い娘を遣られうぞ。』

ときつぱり破談を申し出す。

『それでは困る。三十が三十五になつたとて、さほどの相違でもござるまい。』

『せめて一倍も違ふならやりませうが、其やうな違ひでは、ふつとなりませぬ。』

と、母親はいつかな挺でも動かぬ。すつたもんだの擧句が裁判沙汰。双方ともに評定所に出て爭論することになつた。

土井大炊頭利勝が裁判長であつたが、列座の陪席を見渡して、

『各評定の面々にも此の捌なされよ。』

と云ふ。

此時、伊豆守はまだ若年であつたが、公事の捌を承はり申せとの將軍家よりの上意にて、同じく列席する。すると伊豆守の面には微笑の影が浮んで心中に會得あるものゝやうに見える。大炊頭之を見て、

『伊豆殿一つ捌いてお見やれ。』

『如何かは存ぜねど、折角のお尋、一つ試に申すでござらう。』

と、伊豆守は言下に答へる。

松平伊豆守は娘の母親の方を屹と見て、

『母が申すところは一々尤もに聞え、道理至極にてあるぞ。』

と云ふ。聟はつと平伏し、

『私事は、決して年を隱し申したるにてござりませぬ。媒介人の誤れるは私の咎とも覺えませぬ。若し此緣組破談と相成りては私面目を失ひまするにつき、此儀偏に御聞き入れ下されませ。』

と、熱心面に現れて申す。伊豆守はそれに耳をも假さず、

『緣にありつきたいは娘であらうなれば、斯く申す伊豆が肝煎りて遣はさう。ぢやが、どうぢや、母親、最前其方が申した、年齡がせめて一倍も違ひたらば遣はし申さうとのこ

とは、まこと誤りではなからうな、それが口違うては肝煎は致し難うあるぞ。』

と申せば、母親、

『まことに辱けなうござりまする。初めから私の方に口違ひは毛頭ござりませぬ。聟の方がとやかく言葉を變へるのにてござりまする。』

と、さもしたり顏する。

『むう、さやうか。其方の申すことは如何にも道理なれば、娘より歳一倍ならば嫁に遣はすとの一札を認めよ、某よい聟を取らせてくれよう。』

『其一札は容易いことにてござりまする。』

と、母親はさら〳〵と一札を認めて差出す。伊豆守は一讀して、

『おうこれでよし〳〵。』

さて媒介人の方を見て、

『是非に此娘を緣づかせたいとて、さま〴〵に歳を申したるは、幾重にも不埒である。ぢやが男も此上は心を急かず、五年辛抱致せ。』

との沙汰に、聞く聟も媒介人も怪訝な顏。伊豆守は重ねて、母親に、

『其方にも、五年待ち申せ。』

『それは如何なことにござりまする。』

と、母親が云ひも果てず、

『十五歳の娘が五年待たば二十歳に相成るぞ。聟は三十五歳なれば五年辛抱致さば四十歳、丁度娘の年の一倍に相成る今少しのことぢや、双方ともに氣長く待てよ。』

との裁判に、大炊頭を始め、列座の面々、いづれも打點頭き

『面白い沙汰ぢや、しかも理に合うて、更に依怙のところがござらぬ。善う捌いた。』

と感じ入る。

母親案に相違して、暫くはそこを立去り得ず。やゝあつて、

『恐れ入りました御裁判。つきましては私考へまするに、これから五年待つと申すことは、餘り歳月も長うございますれば、媒介人の申すに任せ、取極めた日取に嫁入りさするでございませう。』

『むうそれは勝手ぢや。其方が都合好ければさう致せ。違背致すな。』

『心得ました。』

聟は固より、媒介人も大喜び、大滿足で、

『いやもう酸いも辛いも甘いも嚙み分けた御裁判ぢや。』

此裁判は伊豆守が裁斷の皮切であつたと傳へられる。

第三　牛蒡狩

伊豫の國大洲の城主加藤侯參覲しての途次、伊勢參宮の童

兒に逢ふ。

『あの小僧の生國を問うて見よ。』

と、伴人に下知すれば、伴人心得て、

『これ、汝はどこの生れぢや。』

と尋ねる。

『備前の生れでござる。』

『何ぢや備前のものぢやと。汝の言を聞くに備前訛はない。虚言を吐き居るな。』

と、伴人は戯談紛れに云ふ。童兒莞爾と笑つて、

『備前のものは虚言を吐くを恥と致せば何で虚言を申さう。虚言吐くは殿様からの堅い法度でござる。』

と、申す。加藤侯駕の中にて此話を聞いて、

『さて〳〵新太郎少將（池田光政）殿の學と云ひ德と云ひ洪大無邊のものであるわ。備前のものは虚言を吐くを恥とすると申すを見ても、少將殿の教への行屆いたるが知れる。』

と痛く感じ入つた。

光政は一生涯新太郎と稱して、別に何々守などと申されぬ。

ある時、諸大名、打寄りて話のついでに、

『何とかお改めなされては如何でござる。』

と申す。光政之には返事もせず、

『近頃江戸の町を通るに、鍛冶屋に大和守、鏡磨に何の大椽など申す名がござる。之を見ても有難味はござらぬのう。』

と、それとなく申される。江戸往來の關札にも決して備前少將とは認められなかつた。我は鎮西八郎にて足れりと云つた爲朝に似て、心ゆかしく覺える。

明主の下には賢臣のある習で、此新太郎少將の下には、熊澤蕃山とか、津田永忠なんどの賢人が少からずゐたが、其他にも史乘には名の知れぬ硬骨の臣下が乏しくなかつた。

高木左近左衛門と云ふものが使番をして居た時、城の東北に川を隔てて小姓町と云ふのがある。其竹林に鵯の多くゐたるを見て、家來を遣つて捕らせた。新太郎少將之を見て、『制禁の竹藪に網を張るなんどゝは不埒な至り、屹度懲らすであらう。』

と、いきまいて云ふ。高木聞いて、殿の御前に參り、『さらば某の家來は死刑、又某は切腹でござりませう。戰場にて君の御馬前に討死すべき侍を僅かの小鳥に代へ給ふはそも〳〵殿の御過でござる。』

と、恐れ氣もなく申す。少將聞いて、から〳〵と打笑ひ、『よいわ〳〵。』

と、其儘に事は沙汰巳みとなつた。

家中の或侍に長槍五十人を預けられたことがある。彼ものを知つて御沙汰に從ふは、殿を欺くものにてござれば平に『某はとても長槍を掌る身にてはござりませぬ。自分の不肖お斷り申しまする。』

と云ふ。家老の池田伊賀之を强ふるもいつかな聞かぬ。少將聞いて、追つて鐵砲を預けようが、先づ今は長槍を預けよとの沙汰。伊賀出でゝ之をすゝめたるを、側より高木左近左衞門、

『我心に出來ぬとあるを、如何に君命なればとて、受くべきことがあらう。』

と申せば、伊賀かくと殿に申上る。

『如何にもぢや、さらば鐵砲預けよ。』

と、新太郎少將は諫に從ふこと流るゝが如しであつた。

古の君子は其過や日月の食の如し、過てば民皆之を見る、改むれば民皆之を仰ぐ、今の君子は豈唯に之に順ふのみならんや、又從つて之が辭をつくる、と孟子にあるが、全く其通り。今の政治家は過があると、無理に其過どほりにやり遂げようとする、やり遂げようとするばかりではない、聖旨までを云々して己はいゝ顏をしたがり、人民を愚にするとをつとめる。これが賢愚明不明の岐れるところで、賢明なる君主は諫に從ふこと易く、過を改むるに吝ならぬ。千羊の皮は一狐の腋に如かず、千人の諾々は一士の諤々に如かず。わい〳〵連に謳歌されるを喜び、獨りよがりの太平樂を並べ立てゐるやうでは、萬事が思ひやられる。そこへ往くと池田新太郎少將などは遙に見上たものと云はねばならぬ。

山田道悅と云ふ新進氣鋭の士があつた。ある時殿の御前に

て四方山の物語の折節、

『殿は蕗を召上らぬと承はる。それはどのやうな譯にてございまする。』

と尋ねる。少將は、

『何別の仔細もない。』

とばかり、一向に取合はぬを、道悅押返して、

『其仔細お話くだされませ。』

と申す。

『されば先祖信輝公が長久手にて討死の場所は蕗の畠とか聞く。そのやうなことにて蕗は食べぬわ。』

と仰せられるに、道悅畏まつて、

『殿はまことに仕合せのよいお方にてございまする。若し御先祖樣が田の中にて討死し給はゞ、殿は飯を召上らずに、餓死し給ふべきであつたるに、蕗の畠とは返す〳〵も御運目出度うございまする。』

と臆面もなく申す。少將顧みて他を言つて、更に其無作法を咎められぬ。

一日鷹狩して城に歸りたるに、青地三之丞と云へる家臣御前に罷出で、

『殿、今日の牛蒡狩には獲物が澤にございましたか。』

と申す。

『異なことを申すのう、牛蒡狩とは何ぢや、定めし仔細があ

らう。』

と、少將不審の眉を顰める。三之丞畏まり、

『いつやら鷹狩の御歸りに、當番のものどもへと、其日の御獲物を羹にして下し賜はつたことがござりまする。辱ないことに思ひて、頂戴致しますると、これはしたり牛蒡ばかりでござりましたから、定めて今日も其牛蒡を狩らせ給ひたると心得ましたのにてござりまする。』

と包まず申上げる。

『其やうなことがあつたるか、怪しからぬことぢや。料理人呼び出せ。』

と、少將は痛く料理人の不埒を叱り、其日に獲たる雁を羹にして當番の侍どもに賜はつた。

大久保彦左衛門の鶴の羹と能く似た話で、いづかたにも此やうな不埒な奴がゐる。ゐるとは知りながら、泣き寢入りになるのが多い世の中に、流石は賢君新太郎少將の下には硬骨の臣が乏しくなく、善く輔佐の實を擧げたのである。

第四　料理通

鎌倉の管領左馬頭基氏は常に美食を好みけるが、或時料理人を呼び寄せ、嚴かに命じて云ふ、

『此鮒を善く燒いて、其後羹に致せ。決して疎に致すな、屹度心得よ。』

『心得ました。』

の言葉をあとにして、基氏は内に入つた。

料理人は命のまに〳〵善く炙りて味噌汁の中に入れ、鹽梅善う調理して膳部に備へて出す。基氏椀の蓋を取りて見るに、如何にも鮒は火が善いほどに通つて、旨さうであるから、先づ片方を食ひ、又ひつくり返して其片方を食べんとすると、之は如何に、一方は生の儘であつた。基氏以ての外に怒り、

『料理人を呼び出し候へ。』

と荒々しく、執事に沙汰する。さあ一大事が出來したものかな、不便ではあるが、主命もだし難く、執事は料理人引連れて御前へと罷り出る。覺悟はしてゐるものの御手打に逢ふと

思へば、料理人は色を失つて、唯震へわななくのみである。基氏大刀を手に握りてつか〳〵と進み出で、くわつと料理人を睨みつけ、

『汝、日頃忠義の心なき故、斯やうな疎忽を致すのである。速かに斬つて棄つべき奴ではあるが、此度は許してくれる。以來はきつと心得て料理を致せ。』

と云ふ。料理人は唯夢に夢見る心地で、茫然として、嬉し涙さへに出ない。基氏重ねて、

『ぢやが、此度も唯にては許し難い。裸で此の縁の端に蹲踞うて居れ、許しのないうちは他に罷り去ること堅く相成らぬぞ。』

と云ひつけて、其儘鷹野に出る。

執事は淺ましい姿してつくばひゐる料理人を見て、

『殿の御留守の間は苦しうない、臺所へ罷り出て衣類を着けゐよ。』

と、情をかける。そは辱けなしと、料理人は臺所に參つてゐたが、其夕暮、殿の御歸館と聞いて、料理人は素早く裸になつて、又もとの如く縁の端に蹲踞まる。基氏此體を見るとひとしく、

『やあ、汝はまだ裸になつてそこにあるか。許す、早う退り居らう。』

と云ふ儘奥に入るとひとしく、執事を呼びて、

『あの料理人めは、さほどの過にてはないが、後日のために處分したのぢや。さりながら、如何に予が沙汰であるとは云へ、終日裸にして置くとは、餘りに汝が手ぬかりではないか。我が善惡を正すもの汝より外にはなきに、なぜ斯やうなめには逢はしたるぞ。向後は心得て、予に過のないやう取計らひくれよ。』

と申つける。流石に此基氏は凡物でなかつた。輔弼の臣宜しからぬがために、君明を蔽ふことは、まことに寒心すべきことで、國家の前途のために由々しい大事である。輔弼の臣の責任は重且つ大で、君の過は輔弼其ものゝ失體であるから、當然自ら負ふべきものである。然るに此頃の輔弼の臣たるべ

き人は自分の失體をも君になすりつけて、自身は素知らぬ顔で口を拭つてゐようとする。驚くべき現象ではないか。一管領と其執事との間を見ても、今の連中は赧然たるべき筈である。若し赧然しなければ、到底度すべからぬものだ。

序に云ふ、今日名古屋の料理はおつであるとか、ひこつ(尾張の方言)であるとか云はれて、贅澤であるが、信長時代の名古屋は片田舎に過ぎなかつた。信長の口には三好家の料理は甘くあつて合ない、鹽辛く調理させて、始めて之を妙味として賞めたものである。興國時代には料理が旨いの、不味のなど云つてる暇はない。料理通だの、食通だのと云ふのは、太平樂時代、そろ〳〵國の身代が左前になる頃のことだ。尤

も近來の食通料理通は自體怪しいもので、獨りよがりであるから、決して其心配には及ばない。

細川勝元が驕奢であつたことは、臥雲日件錄などにも載つてゐて、其館の美々しさは一通りでなかつたと傳へられる。此人常に好んで鯉を食ふから、諸方から鯉の贈物が山と積んで、細川邸はいつも鯉問屋のやうであつた。ある時、勝元を招待するものがあつて、さま〴〵の馳走をする。其うちに鯉の料理があつた。陪席の人々、箸を執りながら、

『この鯉は結構な料理にござる。』

と申す。すると勝元は一座を見渡し、

『これは名物と覺える。定めて客に馳走のため、わざ〳〵使

を馳せて求められたものと存ずる。唯今各々方の賞めやうは甚だ無骨千萬。あのやうな辭は膳部を賞翫する普通一邊の禮でござる。折角の饗應に其品を云はぬ法はない。此鯉は淀から遠來の物と覺える。他所の鯉は料理して酒に浸す時一二箸に至ると其汁が濁る。然るに淀の鯉は如何ほど浸すも汁は薄く、濁ることがござらぬ。之が名物のしるしである。向後馳走にあづかる折には此勝元の言葉を忘れずに賞め給へ。』

と申した。流石に鯉通の言葉と並居る人はあつとばかりに感心したと云ふことだ。此鯉の料理の仕方はどのやうにしたのだか、此文だけでは善く分らぬが、とにかく、勝元は料理通

であつた。けれども之は必ずしも驚くに及ばぬ。食通になると、其産地を中ることは少しも珍らしくない。唯々半可通の食通、料理通の多きに閉口するのである。

瀬戸内海の魚が一番旨いの、いや、東京灣のが旨く候の、甚しいのになると、仙臺の人までが仙臺の魚を賞め、越後の人が越後の魚を賞める。鰻は江戸前のものかと思ふと、國々の人は自國の鰻を第一だと云ふ。長良川の鮎を賞翫するものがあれば吉野川の鮎を賞めるものもある。けれども之は一體當にならぬことで、つまり其國に生れて其國の物を食べて來たものは、自國の産を旨いと思ふので、必ずしも御國自慢ばかりではない、習慣の爲に實際爾かく信ずるのである。ほん

とのところは全然局外者の判斷に待たねばならぬ。

書畫の鑑定でもさうだが、一ッ人のものを澤山見てゐると、自づから心に融會するところがあつて、一目して其眞贋を區別することが出來る。食物でもさうだ。鯉が好きで、色々の鯉を食べてゐると、其産地其名品を云ひ當ることは難くない。己が國の鯉が一番旨いなどゝ唯習慣に依つて獨り極に信ずるものは、到底料理通、食通の資格がない。

料理は自分に旨ければよし。餘りに料理通食通を振り廻されると、聞くものは、それ丈でげんなりする。

第五　鼻毛中納言

いつの年であつたか、江戸城中に諸大名が綺羅星の如く集まつた其席で、林道春一座をずつと見渡し、

『如何に各方にお尋ね申まする。虎の頸に鈴を繋いで之を野に放つたと致す、此鈴を解き去るには如何致してよろしうござらうか。』

と云つて、したり顔に控へた。

『さあそれは。』

と、一同顔を見合せて、しばし答へもない。すると座中にからゝと笑ふものがある。誰かと見返ると、之は加州金澤百萬石の城主前田權中納言利常である。日頃磊落不羈では通りものゝ大名。

『何でもないことぢや。』

と、唯一言に之をけなし、

『初め其の鈴を繋いだものに解かせるばかりぢや。』

と、事もなげに云ひ放つ。流石學者と云はれた道春も一言なくして引き込んだ。

幕府の沙汰に諸大名の屋敷の垣は八尺を踰ゆるなと云ふことで、其の制に過ぎたものは改めよとのことであつた。利常頑として應せず、改めることは御免下されたしと申す。そこで將軍、親ら利常を召して、

『一たび沙汰致したことなれば御身ばかりにそれ許すことは叶はぬ。法は天下の法である。』

と云ふ。

『辱けない仰。御沙汰を枉げて此利常に特別お許し下される御恩はまこと莫大にて、利常心根に徹して御禮申しまする。』

と、とぼけた顔。

『いやさやうにてはない、許すこと叶はぬと申すのぢや。』

『重ね〳〵の仰せ有り難うござりまする。此利常近頃年老りまして、めつきり耳が聞えませぬ。上にはそれ知ろしめして再度の御諚。いやもう善う分りました』。

と、其儘するりと表へ出て、老中の邸に參り、

『唯今上よりの御意に、此利常には特に舊通りの垣にてよろしいと御沙汰、辱けなうござる。定めし御身から善うお話

し下された、其故と存ずる。天晴輔弼の良臣、お身如きが居られて天下は幸でござる。唯今下城の其足で御禮に參上致した。』

と、獨り極の挨拶して、さつさと歸る。

さあ斯ういふやうに、前田家ばかりを特別扱ひにしては、そこゝから不平苦情の出るは必定。

『どうも困るね、あの金聾は。』

『いや金聾ではござるまい。僞聾でござらう。』

『はゝゝゝゝ、然らば正金ではなうて、僞金でござるかな。』

と、老中どもが寄り集まつて善後策を講じても、もう追つつかぬ。とう〳〵其法令は沙汰やみとなる。

江戸城中のさる場所に掲示が出て放尿無用、禁を犯すものは罰として黃金一枚を徵發すとある。利常之を熟視して、前引まくつて放尿一番、靜かに家來を顧み、

『黃金一枚を出せ。』

と命じ、さて、

『ふゝん、馬鹿め、大名が金のためにしたい小便を辛抱する奴があるものか。』

二三日すると、其掲示は取消しとなつて、小便だけにお流れ。將軍家綱から金澤藩領内の吉崎の牡蠣が美味であるから獻上致せとの命が下る、中納言利常は命を奉じて之を取らしめたが、其儘で一向何とも沙汰がない。三日程經て役人から殿

に、

『あの牡蠣はあの儘では腐りませうほどに、更に新らしいのを取らせませうか。』

と尋ねる。

『おう予ははたとそれ忘れてゐたが、何新らしいのには及ばぬ。あれでよい〳〵。』

と、利常は平氣である。

『百里の遠方へ牡蠣を獻上致せなどゝ、老中も飛だ氣まぐれな沙汰を致す。どうせ腐るのは當り前。腐らねば又どのやうな面倒臭いことを云ふやらも知れぬ。』

と、あとはから〳〵と高笑ひ。腐つた牡蠣に懲りたと見えて、

其後は二度と獻上の沙汰がなかつた。

ある時、將軍家から尾張大納言に頭巾賜はり、城中にて着用の許可がある。利常之を聞いて、

『よし〳〵己も眞似してやらう。』

と、頭巾着用に及んで、のこ〳〵と登城する。之を見たる目付は、

『加賀殿、お脱ぎなされ。』

と申す。

『いや、これは無禮を致した。老年に相成り、頭が殊の外冷えるによりて、つい〳〵着用致したのでござる。』

と、云ひながら頭巾を脱ぐ。目付があなたに去ると、又被る。

二度三度かやうな眞似をする。目付は此旨酒井讃岐守忠勝に言上して、

『御禁止なさらぬと、天下の法度が疎かになりまする。』

と申す。讃岐守は聞き訖りて、

『そりや杓子定規と云ふもの。法には變通がなうてはならぬ。之を禁ぜずとも、誰が加賀中納言の眞似を致さう。加賀殿は天下の大老ぢや。構はぬ、其儘に棄て置けよ。』

との返事。將軍家も此旨を聞いて、

『さらば加賀にも頭巾取らせよ。』

と加賀殿は天下公許の頭巾拜領に及んだ。

小松に隱居して後、鯉を飼つてゐて、之を捕へることを嚴

禁した。山崎長門なるものありて、其禁を破つて之を捕へる。役人よりしか〳〵との旨を訴へると、利常は、

『そりや喜ばしいことぢや。長門の祖父閑齋は武勇の譽あつて、大阪の御陣には先手を承つた。其手柄によつて、彼も大祿を食み居るのぢやが、武勇は祖父に劣らぬものと見える。予が禁を犯して魚を捕ふると云ふのは、先手を承はるよりも勇がなうては叶はぬ筈ぢや。』

との仰せ。それを聞いた長門は背に冷汗、

『あゝ過まつた〳〵。もう再び犯しは致さぬ。』

と、これより一しほに武藝を勵んだ。

利常が臣下を使ふには、萬事此やうな遣方であつたから、

臣下も心から歸服する。嘗つて古英雄を評して、

『豐太閤は雄才大略群を拔きんで、類を絕つ。織田信長は雄武、上杉謙信は英傑、武田信玄は小にして事を成さず。』

と、此評、中らざるものもあるが、利常も亦一個の英雄兒であつた。

若城小兵衞なる家臣が禁獵の雁を鐵砲にて打取つた。此旨役人から言上すると、利常は、

『小兵衞は鐵砲を習ひ居るか。』

との仰。つゞいて、

『其小兵衞急いで之に召出せ。』

と沙汰がある。

『さあ、しまつた。一命を失つたり。』

と、小兵衞は固より萬死を期して謁見する。

『これ小兵衞、汝は二羽の雁を打ち取つたとか聞くが、二發打つて取つたのであるか。』

『はつ、一發にござりまする。』

『そりや見事な腕前ぢや。ぢやが新しい雁は味が善うない。汝が手練は羨ましいのう。』

と、利常は賞めそやす。賞められて小兵衞は穴にも入りたき風情。御前を退がり出て、

『再生の御恩、いつの世にか忘れることがあらう。』

と、感じ入る。

栗田四郎左と云ふ家來が、禁を犯して鷹狩をした。役人から此旨を利常に訴へると、利常は津田正忠と云ふ老臣を呼び、

『四郎左が予に鳥を獻じたいとて鷹野致いたげぢや。其志は殊勝ぢやが、二度と致すなと堅く戒め遣はせ。』

と仰せらる。四郎左は唯慙愧して二度と禁を破らなんだ。

此中納言利常は天稟英雄の資があつたから、幕府から目指されることを恐れて、自ら世を韜まさんとした。それで鼻毛を剃らずに其儘延びるに任せたから、鼻毛は鼻の孔から外へもぢや〳〵と生え出てむさくるしいこと夥しい。

『どうも殿にも困つたものぢや。あの鼻毛を平氣でゐらせられる。同役殿何とよい手段はござらぬかのう。』

『さればさ。一つ鏡を御手元に差上げ置いてはどのやうであらう。』

『さやうさ、鑷を添へて置かう。さすれば、お暇の折には拔かせられるであらう。』

と、鏡と鑷とを御手元に差出し置いたが、一向知らぬ顏。そこで家老どもは時折謎のやうに鼻毛處分案を提出したが、一向採用がない。

ある日、利常が入浴して出たのを見て、家老どもはお側のものに鑷を差出させた。利常之を見ると、家老始め御側のものどもを集へて自ら鼻を指し、

『此鼻でえらい皆に心配かけるのう。ぢやが此鼻で百萬石が

無事のぢやわい。』

と、哄笑一番。

『如何さま殿は賢い。あの鼻毛は大切ぢや、お國と引換へのの鼻毛、粗末には致されぬ。』

と、一同やつと合點する。

けれども根が豪傑肌の大守なれば、時々鋒鋩が電光の如く閃く。

ある時、病の爲に登城を怠りたるが、其後殿中に至ると、老中酒井讃岐守につこと笑つて、

『加賀殿、例の御持病の横着がまた出ましたと見えまするな。』

『何の。疝氣ぢや、これ見られよ。』

と、遠慮會釋もなく、睾丸を出す。一座のものはわつとばかりに高笑ひ、

『例の御戯談が又始まりましたな。』

『いやさうではござらぬ。見せなければ寃罪を雪ぐわけには參らぬ。』

と、どつかとばかりそこに坐つた。

第六　餅の靈驗

大阪陣に敗れて、土佐の長曾我部盛親の弟民部は、一方の血路を開き、山科のほとりなる民家に走せ入り、驚く百姓を斬つて捨て、己が佩ける具足を脱ぎ棄て、身を百姓姿にやつ

し、蓑笠を着け、刀を藁にて包み、下野宇都宮には緣の者ある故之へと志たが、さて東海道は到底通過し難い。そこで山山谷々の間を經、行く〳〵食物を奪つて、信州多賀の明神社に到着したときは、食事を絶つこと二日に及んだ。もはや絶體絶命、此にて自害せうかと思つたが、大軍の敵勢の間をくぐり〳〵て此まで來れるもまだ運命のあるところと思ひ返し、夜もすがら明神に祈念し、今日にて食事を絶つこと二日、明日にて三日となる、若し運命開くを得ば明日中に幸ひを得させ給へ、若しまた運命開かずとあらば今夜中に此社頭に命を失はしめ給へと丹精を凝らす。然るに其夜は事なく夜も明け離れたれば、扨は我運も開くにやと思ふ所へ里人十四五人肩

衣を着けて參詣し、供物を供へて歸り行く。如何さま用ありげにあれば、着たる蓑笠を脱ぎ棄て、上に着けたる袷を脱いで、之に刀を包み、手拭の頰冠りを取つて懷中し、其跡から見え隱れに行くと、途々にて二人三人別れ、四五人連立ちてとある家に入る。民部ずいと其家に立入り、

『ちと案内頼まう。某は西國のものにて占を業と致すが、大阪亂のために歸國出來ず、東國へと志したるが、道々にても咎められ、漸く唯今此まで參つた。何にてもあれ占ひたいことがあれば卽座に奇特な見せよう。某は安倍晴明の子孫で、安倍康豐と申すもの。天下一の卜者ぢやが、亂世の故に、斯く居所も定まらぬ。如何に此座に並び居るものゝうちに此家

の亭主は誰なるかトひ申さう。』

と云へば、一座のもの興あることに思ひ、

『それよからう、お中てなされよ。』

と云ふ。民部しかつめらしく、

『さればさ、此家の亭主は後に、一鄕の主となる瑞相がある。ほゝう、頭の上に白い煙が立つてゐるわ。』

と云はれて、座中のものは、我知らず亭主の頭を見る。民部心に北叟笑んで、

『それ〳〵その三番目に縞の羽織着たる仁が此家の亭主ぢや。』

と云ふ。

『あゝ中つた。旨い〳〵。』

と、質朴な里人は感じ入る。夫より皆々の手の筋又は病人の模様などを占ひゐるうちに時分時だとて膳を出す。民部三日目に食事にありつき、したゝかに食ふ。さま〴〵と珍らしき咄などして、其夜は此に一泊する。近所のものども此ことを傳へ聞いて、吉凶のことさま〴〵と尋ね來て、遂に三日宿泊した。

その三日目の朝、一人の村人來て云ふには、

『昨夜手箱一つ紛失致しました。此うちに金子四十兩あり、其上に大切なる水帳をも仕舞つてござりました。どうか先生一つおトひ下されませ。』

と云ふに民部聞いて、

『手筋や病氣の吉凶とは違つて大事な占ぢや、取出しては上げようが、禮を致さるゝか。』

『はい、其御禮には四十兩の內を半分差上まするでござります。』

『さらば案內者を出し候へ、我等行法に罷申す、其ひまに餅を搗いて供物を作り置かれよ。』

と云つて、民部は案內を召連れ立出たが、これを遠け、やをら川へ下り立ちて、起ちつ伏しつすること數遍、やがて川より出で、彼の家に赴き、壇を飾り、松葉杉葉を散り敷きて、壇上には、首帳を壇の上に置き、餅を備へて其下には新しい布を敷いた。さて一同を呼び寄せ、車座にして、

『金子水帳を盜んだるものは、唯今現はれるであらう。但し其者の命だけはお助け下さるか。』

と、亭主に向つて云ふと、亭主は如何にも金子水帳が出で候はゞ其盜人の命は助け申すべしと答へる。

『然らば先づ我が行法の奇特を各々に見せるであらう。少しにても僞心あつて包み隱さば、山神水神の御罰は直に免れ難うあるぞ。』

と、云ひながら、壇上の餅を取下し、

『さあ見られよ、此餅自然に盜人の方へ歩むであらう。』

と、餅を布ともに座上に置けば、餅は靜に動き出す。座中の人々身の毛もよだちて恐れる。すると、末座から、

『申し〳〵御ゆるし下されませ、其盗人は私にてござる。どうか其餅を鎮め給へ。』

と、名乗つて、盗品を返す。亭主は奇特に驚き、約束の二十兩を差出したが、其うち十兩は其者の命を買つた料とて、亭主へ返却する。一同は神の如くに尊敬する。

餅の靈驗の種を明すと、斯うであつた。

行法するとて水中に下り立つた時、寢たり起きたりして、其間に捕つた龜の子一匹、それを半殺しにして、懷中し、其上に布を敷き、搗立ての餅を置いたのであるから、動くのは當然である。

民部は村の懇意となれる人々に打向ひ、

『各々方の情によりて永らくの逗留、まことに以て辱けない。最早東國に歸らんと存ずれば、是にてお暇申す。』

と云へば、村人は異口同音に、

『何の其樣に急ぐことがござらう。是非に今暫く此處にお止りなされ。』

と止むるを、民部聽き入れず、

『又々折があらば參るでござらう。』

と云ふ。村人は名殘惜しげに、

『さらば之は些ばかりでござれど、この程の御禮にてござる。』

と、各々に銀子鳥目を贈る。

『まことに以て辱けない。さらば此銀子鳥目にて古い袷一つ

と、股引一足調へて下されよ。』

と云へば、其通りに調へてやる。これにて旅の用意も出來たれば、刀を横へて、本道まで案内頼みて送られ、此にて別れを告げて、駿河の長光寺と云ふ寺に落着く。

此に滯留するうち母方の苗字を名乘りて、足立七左衞門と稱する。

ある日、七左衞門、方丈にて書見をなし居たるに、俄に戸の外にて唯ならぬ物音がする。はて不思議やと、七左衞門障子を開いて打見ると、眼は釣上り、髪の毛蓬然として生ひ茂りて、面色蒼然たる、見るからに狂氣じみたる男、血刀打ち振りながら、客殿目蒐けて駈け入るに、

『あれよ〳〵。』

と、老若大小の僧侶は右往左往に逃げ惑ひ、閾に蹶き、佛像に突當り、此世からなる阿鼻地獄。七左衞門斯くと見るより、經机を取るより早く彼の男の足元目蒐けて投げつければ、勢込んで駈け入れる狂人は机に足を浚はれて、ばつたり前へ倒れるに、七左衞門躍りかゝり、首筋捕へて、押伏せ、其儘難なく繩をかける。

折しも此邊に鷹狩したる駿州田中の城主酒井備後守忠利、長光寺に休息せんとて入り來り、此體を見ていたく、嘆賞し

『其七左衞門とやらに目通り許す。』

と、七左衞門を近づけて、さまゞの物語あり、七左衞門も

殘る所なく由緒を述べ立てたれば、備後守は、

『予に仕官致してはどうぢや。』

との懇望、

『有難い御意。仰に從ひますでござりませう。』

と七左衛門は快く諾ふ。それで二百石にて召抱へられ、武州河越に國替の節には五百石となり、次第に加增して千五百石となり、其子の時には五千石となつた。此二代目七左衛門は父が運開きの報恩として、信州多賀の明神へ、五十石の田畑を寄進し、信心怠らずあつたと云ふことである。

第七　寒晒の粉

吉野朝の正平三年正月二十四日、吉野行宮が賊將高師直の勢に燒かれて以來後村上天皇が難を御避けなされたる大和の國吉野郡賀名生の某氏から、近頃手柬を寄せて、御大典記念として贈正一位北畠親房卿の墳墓を村民擧つて修理するとの旨を報じ來した。鐵瓶にも猪口にも半襟にも御大典記念を濫用する世の中に、さりとては善き思付で南朝遺蹟の記念事業としては誠に恰好なことである。南朝第一の柱石たる准后親房卿終焉の地に於ては斯の如き美擧が企てられるに、大日本史の發源地なる茨城縣の闘大寶城址は殆ど破壞せられ畢つて親房卿の忠義の精神が凝りたる其跡形は今後探るに由もないのは誠に傷ましいことである。親房卿が老齡をも顧みず遠く

東國に流離ひて義軍を鼓舞したる壯烈の心事に至りては、儒夫をして起たしむる概がある。關大寶城址は嘗て此老忠臣が職原抄、神皇正統記を訂正し若くは起草したる由緒ある地である。白河以北、雲天日を鎖して孤城援なき間にありて忠孝の大義を闡揚した處である。のみならず親房卿は遙に吉野朝廷と連絡をとり、攝河泉の間に蟠れる楠氏の餘黨と、九州に於ける征西將軍宮及東國に漂泊し給へる信濃宮等と氣脈を通じて、東西大合同の活動を爲さんと計畫したのであつた。小楠公の四條畷に於ける最後の戰爭も畢竟此大合同活動の結果であつて、吉野朝廷にとりても北朝方にとりても最も重大なる合戰であつた。小楠公は固より討死を覺悟したのではない。

身命を賭して是非とも此一擧に勝たんとしたのであつたが、時利あらず雖逝かず、空しく飯盛山の夕嵐に落花と散つたのである。此時に於て親房卿は興國四年關大寶の二城が陷りたるを以て吉野に走り、興良親王を奉じて、和泉、紀伊の義軍を統帥して居たのである。四條畷戰後に於ても親房卿は南山に引籠らずして近畿の間に出沒し、自ら軍に臨み士卒を奬勵して、少しも倦まず、東西合同の運動を爲すに怠らずあつた。伊勢の大湊を以て中國九州との連絡基點と爲し、海賊方を鼓舞して、南山の爲めに盡したることは一日も渝らずあつた。

南山の史を閲すると、後村上天皇の御精勵と御壯烈とが偲ばれて、千歳の下尚ほ人を奮起せしめる。正平七年二月二十

六日、天皇は賀名生の行宮を出でさせ給うて、翌日は楠氏の根據地なる東條に行幸あらせ給ひ、同二十八日攝津の住吉に幸し給ひ、二月十日は天王寺に、同十九日は山城の男山に御駐輦なされた。一度京都は回復せられたが、男山の落城とともに、再び南山に還幸あらせられた。けれども御壯志は暫くも已まず、或は天野山金剛寺に、或は檜尾山觀心寺に、或は住吉に行幸あつて、勤王の軍をお督しなされた。觀心寺の堂後にある檜尾御陵は吉野の塔尾御陵と相並んで、悲風蕭々として今も涙の種である。觀心寺の名物に寒晒粉があるが、之は畏くも後村上天皇の御召料であつたと言傳へられて居る。

寒晒粉を名物として、吉野朝廷の當時を偲ぶ記念とする檜

尾山觀心寺表門の外にある中院は、楠木氏の香華院であるがもとは寺内にあつたと云ことだ。楠公は其少年時代に於て此中院にて院主瀧覺坊に就き學問を修めたと傳へられて居る。又楠公は河内の國錦部郡加賀田の鄕士大江時親に從つて、兵學及武道を學んだといふ傳説がある。楠公が勤王の義軍を起したる時に其妻子を中院に託し置いたとも云ひ傳へて居る。

觀心寺から山越に行けば、半里足らずして東條に達する。東條は楠木氏の根據地であつて、俚俗、山の井と稱ふる處は楠公の誕生地と云はれる。東條に近く赤坂城址がある。赤坂には上赤坂と下赤坂とがあつて、楠公が始めて義を唱へた赤坂城は下赤坂のことである。金剛山から云ふと西北の麓に當

つて大字森屋字甲取山と云ふのが其遺跡だ。上赤坂は之より上手の方に當り、大字桐山字大根月と云ふのが卽ちそれである。此處には楠公が平野將監を守將として置いたが、元弘三年二月鎌倉勢の爲に攻められて、將監は降り、城は陷つた。

此東條に近い甘南備の峰條と云ふ處に楠公夫人の遺蹟と云ふものが存して居ると云ふ傳說がある。楠公夫人のことは史料殆ど匱乏して、其事實は小楠公の自殺を止めたと云ふ以外に何等の事も傳はつて居らぬ。藤原藤房の妹で名は滋子などと云ふ說もあるが、固より取るに足らぬ。觀心寺の古記錄に依ると、南江氏で、名は久子とある。南江氏の名は湊川神社に傳へてある湊川戰死者の中に南江備前守正忠と云ふのがあ

るから或は楠公夫人は此妹であらうかとも云はれて居る。併し之には確證がない。楠公夫人は如何しても河內の豪族から嫁した者であらう。さすれば南江氏の出であると云ふ說は、藤房の妹說などよりは、遙に理窟が合つて居る。夫人は小楠公戰死の後、髮を剃りて尼となり、甘南備の里に草庵をつくり、觀音を奉祀し、此に其晩年を送つて敗鏡尼と稱した。時の人此庵室を楠妃庵と名けたが、後に憚るところありて南庇庵と書改めた。夫人は正平十九年四月十七日六十一歲で沒して、諡號を玉山蒲圃尼と云つた。以上は一種の古き言ひ傳ばかりで何等の確實なる史料は殘存して居ない。併し此傳說の中には幾分か眞實が含まれて居るやに思はれる。同時に後人

の附托も混同して居るんであらう。楠家代々の法名と云ふものが傳はつてゐるが、全然當にならぬ。例へば楠公を忠德院大圓義龍大居士、小楠公を大光寺殿雲山昇龍大居士などと稱へるなどは、後人のさかしらごとなること無論である。之から推すと敗鏡尼だの其他のまことしやかな傳說は固より大なる疑問である。

けれども其遺蹟なる觀音堂五輪塔などは恐らくは此貞烈なる夫人晩年の事蹟を語るものではあるまいか。近年篤志の人が遺蹟保存會をつくり、其湮滅せる事蹟を世に傳へんとするは昭代にふさはしい美事と言つて宜しい。

第八　伊勢參り

德川家康の上杉景勝征伐に從ひたる池田三左衞門尉輝政は下野の小山に居たが、使を大阪にある夫人に使はさんとて、老臣共を召し、

『其使には誰がよからう。面々談合して思ふところを、書付けて出せよ。』

と云ふ。各々畏まり候とて、翌朝書付を差出せば、渡邊總左衞門と記してある。輝政は左の袖をかいさぐつて、

『これ見よ。』

と取出すのを見ると、之も同じく渡邊總左衞門と記してあつた。さらばと、渡邊を召して、此旨を仰せ渡すと、

『之は以ての外の大事で御座りますれば、私風情の者にはと

てもつとまりませぬ。平に御辭退仕る。』

『そりやならぬ。斯く大勢の議にて一決したる上は、兎角の論には及ばぬ。』

との仰。

『さらば今一人を御添へ下され度い。人は病氣と申すことの御座りますれば、路次にて如何樣のことが出來致すやらも分りませぬ。』

『尤もぢや。野中市左衞門を添へて遣はさう。』

とやがて二通の書を二人に渡した。

慶長五年七月二十五日、初秋の風がそよ〳〵と吹く折りしも、渡邊、野中の二人は下人をも召連れず、小山を立出でて、

三河の吉田は池田家の領分であつたが、此處へも立寄らず、尾張の熱田の神官大原左衞門太夫は相識の間柄であつたから潛に立寄り、此處の下人が竹を擔ぎ、葉一把を其先に括付け目印をして七八町先へ行くのを案内として伊勢の境まで着いた。

時は丁度石田三成が、兵を擧げんとして何方も騷がしい眞ッ最中であつたから、路次は非常に難儀であつた。兩人は敵の中を行くのであるから食事を乞ふこともならず、荒米を咬みながら關の地藏に着いた。此處にて人の噂を聞くと、關所を通ることは思ひも寄らぬ。兩人は談合して、

『伊賀越にかゝらうか、朝熊越に致さうか。』

と思案にくれたが、先づ伊勢の大神宮の神職上部左近の許に立寄り、一夜の宿を借らんと云ふ。

『此騷がしい世に何處から參詣の人があらうぞ。』

とて取合はぬばかりか、

『一宿のことはさておき、早うさつさと出て失せよ、誰かある、棒にて叩き出せ。』

と云ひ罵る。

『あゝ憎い奴であるわい。池田家の恩を受けたる身なるに、不埒なる云ひ條かな。』

と、兩人は心中に怒つたが、詮すべもない。其儘門外に立出ると、左近追駈け來り、

『いづくの御方ぢや。』

『池田三左衞門尉の家來である。』

『さらばこの川の堤の下で乞食の捨てたる莚を被りて待て居られよ。』

と左近は小聲になる。二人は點頭いて、其樣にして日の暮れるを待つ。夜に入ると、

『晝の乞食はいづこに居るぞ。』

と云ふは、まさしく左近の聲。兩人聲を揃へて、

『おう此處ぢや〳〵。』

左近は兩人を裏口より一間のうちへ請じ入れ、夫婦給仕をして食事をすゝめる。

『朝熊越は人の往來稀なれば、女乞食をも殺すほどにて、中中に通り難くあらう。一命を賭して伊賀越にかゝられよ。』

と云ふに、兩人は荷俵を負ひ、破れたる襤褸に身をやつし、御祓箱を笠につけ、見苦しい小脇差を求め出して、これを指し、曉のほど宮川を打渡り、關所近くへ來るに、通るべき樣もなければ、一封の書を深田の中に隱し埋め、其夜は山に臥し、翌朝一通の書を紙撚にして、青草で、一二三のしるしをつけて、之を笠の緒とし、一の關所にかゝる。關のものども之を怪み、

『此やうな大騷動のときに伊勢參りするものがあらうか。怪しのものだ。それ打殺せよ。』

と、ひしめく。兩人は言巧に陳ぶると、荷俵、御祓箱、脇差の鞘まで打碎き、髪を解かせ、身體くまなく取り調べ、怪しむべきことなしとて通す。次の關所も事なく通りて奈良に出で、とある寺に入り、酒を求めて飲むに、住持まゝしくもてなし、

『さてもお身達はよくも〳〵欺かりて、此までは參られたな。』

と、星を指されて、兩人は驚き、否々左樣のものにはあらずと陳じたが、住持はつや〳〵合點せぬ。やがて、此處を立ち出で、奈良と大阪との間の關所へかゝると、又咎めたから、前の如く陳述する。

『さらば通せ。』

と、云ふに、否、ならぬと聲かけたものがあつた。

あなやと驚き、何者の呼ばはるぞと、彼方を見ると、これは關の固の人々の内に最も上座に座せる老人であつた。

『有無は云ふに及ばぬ。怪しい者と見てとれば、斬捨てゝ仕舞へ』

と下知する。すると末座から、

『まことの參宮の者と見えるを斬捨てるは神の祟も恐しく御座る。』

と云ふ者もあつたが、老人つや〳〵承引かぬ。末座の者は言葉を盡くして再三云ふに、老人は不承〳〵に、納得して、兩人は危ない處をのがれた。千辛萬苦してやう〳〵大阪に行き

着きたるに、關東方の諸將の邸は矢來を結ひ廻して大阪方の兵士は其門々を固く警護し、蟻の這ひ出る餘地もない。兩人はかねて懇意なる材木商の家に赴きて、此處にて大根を買ひ、之を荷負ひて池田家の邸の周圍を

『大根召せ、大根召さずや。』

と呼ばはりながら歩いた。或時渡邊總左衞門が、呼賣歩くを、池田家の家臣、久保田市太夫なる者窓より之を見て、

『何と渡邊によく似た男ではないか。』

と獨語ちつゝ、

『大根や大根や。』

と呼び立てるに、渡邊は其窓の下に立寄り、笠を脱いて大根

を差出す。久保田小聲になり、

『珍らしい事ではないか、何處に御座る』

と問ふ。渡邊は、しか〳〵の處に居る旨答へて己が宿所の材木屋の許に立歸り、野中にしか〳〵の物語をする。野中聞いて、

『こは嬉しや、よい便手が出來たことよ。』

と兩人喜び合ふ。久保田は池田夫人の附添役なる若原勘解由に此事を話し、大阪方の警護の兵士に斷りて薪を運ぶ人夫三十五人を表に出し、其中の一人を止め置き、渡邊を其代とし、薪を荷負ひて門を通らしめる。

『その男待つた。』

『怪しい者では御座らぬ。』

『これは今朝外出した人夫ではない。』

とて渡邊を許さぬ。すは一大事と、

『これは久しく病にて打臥して居たる者なれども、快くて今日は出でたる者にて御座る』

と云つたが、警護の兵士共は、更に合點せぬ。勘解由立出で て色色と斷りを云へば、兵士も漸くに承諾し、渡邊はやつとの思で、大阪の池田邸に入り、池田夫人の前に至りて輝政公の仰をこま〳〵と申傳へ、笠の緒を解き紙撚にしたる書面を差上げた。夫人は簾を隔てゝ渡邊を引見し、渡邊は樣々苦勞の趣を述べて、退出した。

渡邊は其の精忠にしてよく使命を辱めなかつた褒美として、祿を加へ與へて、其功勞に酬はれた。渡邊は身の面目を施して引退る。人々は其忠義を傳へて當時の語り草とした。

第九　靜御前

義經記と云ふ書物は、いつ頃著作されたのか、確な處は不明であるが、多分足利の中頃以前の作であらう。從つて著者の名も不明である。行文流暢で、よく書きこなしてはあるが、事實を敷衍潤色して、著者の假構を交へてあるから、寧ろ物語りもので小說に近いものである。之れを吾妻鏡の記事に比較すると、本書が甚だしく事實に遠い點を多く發見する。で

あるから吾妻鏡と比較の出來ない場所も定めて事實とは甚だしい相違があらう。例へば靜が鎌倉に來て滯在して居た宿所は京都から靜を連れて來た安達新之助の家であるのに、義經記には堀藤次親家の許にあつたと記されてある。又靜の男兒を分娩したのは鶴ケ岡八幡宮の社前に舞うた後であるのに、義經記には舞の以前にしてある。萬事が此調子であつて、頗る信用し難い。然るに吾妻鏡には分娩して後鎌倉を去りたる以後の靜に就ては最早や何等の記事も見えない。義經記には歸洛の後、天龍寺の麓に、草庵を結びて尼となり、翌年二十歲を以て大往生を遂げたと書いてある。此天龍寺とは何處であるか、義經記には假名で書いてあるから、確かなことは分

らぬが、京都で天龍寺と云へば嵯峨の天龍寺であらう。ところが天龍寺は足利の初世卽ち北朝の曆應二年の建立であるから、靜の時代にあるべき筈がない。併し義經記の作者は、或は之に心付かなかつたのではなからうか。之で見ても此書は足利時代の著作で、其本音を吐いてゐるのではあるまいか。天龍寺が他にあつたならばいざ知らず、洛中洛外を取調べて見ても、之と同じ若くは之と同音なる寺は他に無い樣である。嵯峨野と云ふと、遁世者にはもつて來いの所で、妓王妓女若くは瀧口入道にしても、此地に隱れたのである。斯う云ふ緣故があるから義經記の作者も靜の晩年を此處に送らせたかも知れぬ。けれども此事は强ち假構とも云へぬ。嵯峨野で死んだと云ふ傳說があつて義經記の作者は靜時代にはなかつたけれども、當時世に時めいて居た五山の一なる天龍寺の麓と追記して、漠たる嵯峨野よりは今少しく明白と其處を記したかも知れぬ。

併し靜の死所は、實は甚だ不確實なもので、今日其遺跡と稱せらるゝもの、傳說の存せるものも頗る怪しい。下總の栗橋停車場に近い、靜の墳墓は此種類の中に於ても殊に世間に有名なものである。卽ち武藏國北葛飾郡伊坂村の墳墓として、新編武藏風土記稿及古河志に記された者は之れだ。又此墳墓に近い下總國西葛飾郡中田村岩松山光了寺には、靜の舞衣なるものを藏めて居る。蜀山人の半日閑話にも此事を記して、

「此寺に静女の舞衣有之、地黒く織物にて模様日月山龍なり、下袴模様獣の形の由至つて古く、上衣許りにて下袴手にとられず、静女守刀白鞘にて、袋赤地錦襴、静法號、岩松院妙源大姉、文治四年九月十五日、栗橋宿より七八丁右の方へ入、室地渡村の静女の墓印大杉十圍に及ぶ、側に小社あり、一言社と云ふ、一言の池埋まりて田地となる、別當眞言京藏寺」とある。

猶半日閑話には此邊の静に關する遺蹟と云はれて居るものを擧げて次の如く記して居る。

「中田の左一里許に静ケ谷と云ふ村あり、奥州下向の時静此處にて高館落城を聞、立歸りしより、静歸りと云ふ心なりとぞ、栗橋宿の内に淨土宗ジンクワン寺、土手上り口に左會津稲荷

會津の人崇敬の由、右七八丁過川通り大柳あり、凡そ四五抱に見ゆる、俗説に静が楊枝の柳と云傳り」。閑窓瑣談にも静の墳墓の事と舞衣の事とを記してある。之を他の静の墳墓と稱するものに比して、餘程有力な遺蹟のやうに取りはやされて居るが、之れ亦頗る疑しきものと云はねばならぬ。此の舞衣は神泉苑の祈雨の際に静が院から賜はつたものだと傳へられて居る。けれども此神泉苑の祈雨と云ふものは義經記だけに見えたことで、甚だ怪しむべきことである。百人の舞姫が九十九人まで舞ひたるも、天に感應なく、空は澄渡りて一片の雲だになかつたのを、静が百人目に舞ひて、沛然たる大雨盆を覆したと云ふのであるが、そも〳〵以て疑はしい記事であ

る。之はどうしても義經記の假構である事は殆ど辨ずるに及ばぬ沙汰であらう。其を義經が見初めたとあるは、愈以て小説である。して見ると光了寺の舞衣なるものは出所不明なものとなる。貞烈、静の如きが義經のあとを慕うて奥州へ下らんとしたのは、絶無とは云へないが、傳説ばかりで、他に確實なる證據はない。のみならず、静如何に貞烈なりとも、當時道路の困難にして、行くことの容易ならざる時代に、かよわき女の身そらで、おまけに嫌疑のある間を、はる〳〵と京都より奥州へ下らうなどゝは到底あり得べからざることで、思慮ある静の所業としては甚だ受取れぬ。思ふに東國にて死去したと云ふ説は後人の假託であらう。若し義經記の著者當

時に於て此樣な傳説があつたならば作者は喜んで之を用ゐたことゝ想はれる。して見ると此の傳説は義經記より後に云ひふらされたものであらう。果して嵯峨で死んだか否かは覺束ないが、此點は義經記に京都附近の地で歿したやうに記されてあるのが寧ろ正しい傳説と思はれる。兎に角、足利時代迄には斯う言ふ傳へがあつたであらう。猶前に義經記が足利の中頃以前の作であらうと云つたが、此處に傍證として、山崎美成の海錄にある義經記考を引用する。

「義經記は後人の名附けし題名にて、もとは判官物語とぞいひし。扨この物語作いでたる時代を考ふるに、平家物語、盛衰記などよりいとも〳〵後代のものなるは、今更いふ迄もあ

らず、曾我物語などゝ同じ頃のものならんかとぞ思はる。今その一をいはゞ、義經記鬼一の條に、たんかいの義經を殺さんとはかる處に「御免やうのなめし」とあり、口傳書云、「錦革は公方御用の革にて、平人は禁制なり、依之錦革を似せて、かき色にても茶色にても何色にても染て、もやうを白く出したるは、御免にて誰にも用ふる故に、此革を御免革といふなり、」之に依るときは、此革の名、室町將軍の時出來たり、その名目の見ゆれば、それより後のものなる事明けし。猶此外證あるべし。」

第十　劍法と畫法

昨年東京帝國大學の卒業式に文科大學で、天覽に供した中に、美術方面では宮本武藏の繪畫があつた。細川侯爵家の蘆雁六曲屏風と、德川侯爵家の蘆葉達磨と、內田氏の枯木鳴鵙との三點であつた。世間に二天宮本武藏の畫と云ふものが傳はつて居るが、其中でも此三點は取分け從來から名品として傳へられて居る者である。畫の武藏と劍の武藏とは同名にして異人といふ說もあるが、それは劍術の達人がよもやあのやうな名畫を描き得ることはあるまいといふ素人考へで、何等據る所がない。寧ろ劍の武藏と畫の武藏とは同一人であるといふ證據の方が多いのである。武藏の高弟であつたといふ劍術家に、武藏の繪が傳へられてゐるなど、其證據の一つであ

る。

瓦礫雜考に縮寫されてゐる武藏の像も自畫であらうといふ說がある。或る時武藏は細川侯から達磨の圖を描けとの仰を蒙つた。武藏は畏んで精一杯に描いたが、どうも思ふやうにゆかぬ。出來上つて見ると一向に巧くなくて少しも意に滿たぬ。其の日はそれでやめて、枕に就いたが、ふと夜中に起き上り、我が得意の劍法を出さなかつたが爲に畫があの樣に不出來なのであらうと急に灯を點け、筆に墨を含ませて潑墨淋漓と描き上げたところが、如何にも見事に出來上つた。其後弟子共があれはどういふ譯で御座りまするかと尋ねると、武藏答へていふには「我れ劍法を忘れ殿を臆するが爲めに描かれなかつたのである。我が劍法といふは一たび太刀を執れば我れもなく人も無く、貴賤貧富の差別は固より眼中にない。此機を以て描くが故に畫が出來たのである」と。聞く者深く感じ入つたと傳へられてゐる。

「兵法の仕立樣總體一同にして餘る所なく、强からず、弱からず、頭より足のうらまで齊しく心を配り片づりなき樣に仕立る事なり。」「心の持ちやうは、めらず、かゝらず、たくまずおそれず、直に廣くして意の心輕く心の心重く、心は水にして折に觸れ事に應ずる心なり、水に碧潭の色あり、一滴もあり、蒼海もあり、よく〳〵吟味あるべし。」「將軍といふは兵法の理を身に受けては敵を卒に見なし、我が身將になりて敵

に少しも自由をさせず、太刀を振らせんも、すくませんも皆我が心の下知につけて敵の心にたくみをさせざるやうにあるべし」とは、武藏がその兵法三十五ケ條の中に唱へた所であつて、彼れが劍法の極意である。

武藏名は政名、本姓は新免、播州の人、二天は其號であつた。父は新免無二齋、十手の達人であつたが、武藏に至つて十手を廢めて二刀にした。十三歳から勝負をなすこと六十餘度と言ひ傳へられてゐる。其中でも十三歳の時に播州にて有馬喜兵衞に勝ち、十六歳の時但馬で秋山を擊殺し、洛外蓮臺野で吉岡に克ち、豐前の船島にて佐々木巖柳に勝ちたるは有名な勝負であつた。正保二年五月十九日、肥後の熊本で歿し

たと云ふことである。

第十一　敵討

禮記の曲禮に父の讎は俱に天を戴かずとあるが、復讐は支那に流行しなかつた。豫讓が趙襄子をつけ睨つた時も、范中行氏は衆人もて我を遇す、かるが故に我も衆人もて之に報ゆ、知伯は國士を以て我を遇す、かるが故に我も亦國士を以て之に報ゆといつてゐる。嘗て事へてゐた范中行氏は知伯の爲に滅されたが、其讐を報いなかつたのは范中行氏の待遇が惡かつたからで、知伯の爲に讐を報いんとしたのは知伯の待遇がよかつたからであると云ふのである。かうなると復讐も一種

の報酬であつた。復讐の本場は寧ろ我が國で、支那を暗殺國とすると、日本は復讐國である。舊い所では眉輪王が安康天皇を弑し奉つたのも復讐である。けれども復讐の大立物はどうしても父の讐を討つた曾我兄弟と、君の仇を打つた赤穗義士とである。鎌倉將軍の幕下に斫り込んで其出頭人を斬り殺したといふ華やかさと、四十七人が一團となつて、江戸幕下の高家の屋敷を包圍して積る怨みを晴らしたといふ大規模の計畫とが、天下の人目を聳動したからであらう。敵討は武士道の花で、我が國に於ける流行物であつた。尤も中には崇禪寺馬場の樣な返り討の悲劇もないではないが、多くは壯快な美談である。

多くの敵討の內で、一種事變つた話がある。其の姓名も鄕貫も一切明かでない。或もの親の敵有つて十四五年つけねらつたが、天運廻り合はさず、何くにても行き逢はなかつた。餘りの事に斯くも武運の盡きたる我れ、到底目的を果す折はないと、こゝに諦めて世を遯れ、圓頂緇衣の身となつた。或る時大勢の僧侶と一堂に會した折、其中に仇によく似た僧をみとめた。つと側へ近づいて其の生國俗名などを問ふとしかじかと答へた。積年つけねらつた敵である。とゞろく胸を押ししづめ、御身は今を距ること何年以前何の某といふものを打ちたることなきやと尋ねる。如何にもその樣な事が御座つたと答へる。某は其の子である、十數年來御身を探し求めた

が不運にして邂逅さねば今は是非なしと斯くの如く出家したので御座るといへば、それは如何にも御氣の毒千萬、手前事は今申す通り貴所の父上を打ち果し、其後何かと世を渡るべき道を求めたるも、人を過ちたる報いにて捗々しくもあらねば是非なく出家致したので御座る、さればよく〳〵御覺悟なされよ、手前は身上にありつかざる爲に出家し、貴所は不運を諦めて遯世被成たのであれば、手前を御打なされ、本領安堵をなされたが宜らう、俗の時なればなか〳〵貴所には打たれ申すまじいが、今は此樣な身の、手向ひは申さぬ、さあ尋常にお打ちなされ、早く〳〵とせきたてる。此方は暫し打案じたが、いや〳〵互に出家沙門の身、武道の執着は無用と存

ずる、某は御身を打ち申すことは致すまい、御身は亡父の菩提を御弔ひ給はれ、と決心の臍を固めて思ひ止まつた。

斯くて四五日過ぎたが、如何にも殘念で堪らぬ。一夜更闌けて後、剃刀をよく磨ぎすまし、彼の僧の寮に往つて見ると仇の僧は前後不覺に熟睡して居る。頭を押へて押し動かし、先日は斯樣に申したれど已むを得ず打つので御座る、御許しなされといふ。彼の僧は目を醒ましたが起きも上らず、度々氣の變る人で御座るのう、どうとも勝手になされ、宵から片片を下に着けてしびれたから、寢返りしようと云つて、ぐるりと向き直り、其儘またも正體も無く後は高鼾。此の態度に流石の男も討つべき勇氣もなく、其儘逐電して諸國を修行し

たといふ。是は仇討の變例であるが、惜いとには敵も味方も其姓名を逸してゐる。松雲公御夜話中に見えて居る話である。

第十二　成金

江戸時代では元祿頃から町人の金融がよくなつて成金が雨後の蕈のやうにによき〳〵出來た。從つて奢りが增長し、僭上沙汰が少からずある。紀文が節分の豆撒きの代りに小判を撒いたの、奈良茂が黃金を投げ散らして雪を踏み消さしたのといふのは、有名な逸事として傳はつてゐる。石川六兵衛は照降町の角屋敷に住んでゐて、六箇所の大地面を所有した大地主であつた。此女房が非常な虛榮心の强い女で、平常縮緬

綸子の類を着し、晴れがましい處へは緞子綸子金入の類を着する。或る時將軍綱吉の上野佛參のお成りを拜見せんとて、下谷廣小路本阿彌の向ふ側なる仕立屋の家を借りた。其日は赤毛氈を敷き簾をあげ幕をうたせ、衣裳美々しく飾り立てゝ、腰元三人下女二人を華かに粧させて、今やとお成りを待ち受け居つた。往來止の頃となると、己が膝元に香爐をおき、心靜かに名香を焚く。前驅の大名小名が廣小路に差し蒐かりて、えならぬ香ひの薰ずるに皆々不審がる。將軍も鼻を蠢めかしながら、駕籠の內から邊りを見廻し、六兵衛の女房の前にある香爐の美しきに目がとまる。何者なるぞ、尋ねて見よとの上意があつた。直樣吟味にとりかゝつて、翌日石川六兵衛の

女房の由言上すると、町奉行に吟味を命ぜられ、六兵衛夫婦は獄に投ぜられる、町人の分際として敷物を敷き香爐を持參するのみならず、本所に廣大なる屋敷を有し、六兵衛召使は常に之を本所下屋敷と唱ふるなど越度なりとて家屋敷家財缺所になり、六兵衛夫婦は江戸十里四方追放を仰せ付けられた。けれども相州鎌倉に六七百石の田地を所有してゐたから、そこへ引き籠りて猶安樂に暮したといふ。

大阪の銀座年寄中村内藏助も此時代の成金であつた。尾形光琳などは其の保護を受けてゐたもので、文藝の爲には多少の功勞があつた。光琳が其の次男小西壽市郎への遺書にも「其方事我等嫡子に候得共我等事唯今相究めたる家業も無之末々

其方身上之安否難斗不便に存候に付幸中村内藏助樣御悃意故小西彦九郎殿方へ養子に遣し候中内藏助樣御息女お勝殿其方妻女に被相究小西家名跡相繼候事偏に内藏助樣御厚恩に候間隨分御意に相叶申樣に孝養可致候お勝殿事疎略有之間敷候」とあるのを見ても、光琳と内藏助との關係の深かつたことを知るに足りる。此内藏助も其末悲慘な運命に陷り、正德四年六月二十八日其の家財を公儀に於て入札に附した。茶器總數八百六十九點で此落札銀高は千二百八十九貫目餘、闕所屋敷は十六個所で落札銀高六百六十一貫目餘であつた。茶器道具類の内で一番高價であつたものは、眞龍齋の墨蹟で四十一貫三百三十匁、其次が坂部井戸茶椀で三十五貫百匁、其次が千

歳硯箱で三十貫五十匁八分、片輪車手箱が二十八貫七百九十九匁七分五厘、牧溪が十七貫三百匁、雪舟の山水屏風は十貫五百三十匁、同じく布袋は六貫七百五十匁、光悅の乘船硯箱は二貫二百五十匁、同じく松椿硯箱は四貫六百九十七匁六分などゝ見えてゐる。雁半や、伊達家やの入札が思ひ偲ばれてさても有爲轉變の世や。

第十三　竹の杖

名物に旨い物なしと云ふが、名所古蹟にも隨分下らないものが尠からぬ。須磨には光源氏が居たといふ源光寺といふ寺があり、石山には紫式部が源語を草したといふ座敷がある。

逗子の不動堂が浪さんによつて名高くなつたのも可笑しい。況して寶物などといつて參詣人に拜ませるものには、碌なものが殆んど無いといつてよい。木曾の寢覺めの臨川寺に行くと浦島太郎の釣竿といふものがある。駿河の三保神社に參詣すると羽衣の斷片を見せられる。吉野の如意輪堂に行く者は必小楠公の鏃の扉を見て來て有り難さうに吹聽する。以ての外の事である。如意輪堂の壁板に一族郎黨の名を書き記し、其奥に返らじの歌を書き付けたと太平記にあるではないか。堅い扉の木に鏃なんどでどうしてあゝ旨く彫りつけられるものか。

藏前の札差伊勢屋の隱居に百龜といふのがあつた。年々函

根へ湯治に行くのを例とする。或る歳、湯治歸りに大磯の鴫立澤にある西行庵の庵主はなじみであるから久々にて立寄つた。これはようこそその御入來と、庵主も茶やら菓子やらを出してもてなす。四方山の話をして、又いづれと再會を期し暇乞して立歸る。此時隱居は竹の杖を忘れて其儘駕籠に乘る。供の者もそれと心付かずに西行庵を後にした。庵主は暫くにして其邊りを見ると竹の杖がある。はゝあこれは今の隱居殿が忘れて往つたさうな、是は面白い竹の杖だといぢつてゐたが、ふと思ひ付くやう、此杖を西行がついた杖といつてもよもまがひものとは思ふまい、此庵に西行の杖と稱して收めてあるものはもとより西行の杖ではない、此隱居殿の杖の方が

餘つ程似合つてゐると、今までの西行の杖と稱へたものを取り棄て、百龜の杖と入れ替へて紫絹の服紗に包んで有難さうに納めて置いた。

それから四五年過ぎて、又々此隱居が湯治歸りに西行庵を訪れると、以前の庵主は前年亡くなつた後で、今は新しい庵主が住んでゐた。西行の杖を拜みなされ、一人前十二文づつで御座るといふに、百龜の伴の者達、いづれもそれは話の種だと、十二文宛出して拜見する。庵主は恭しく百龜の杖を取り出し、是こそ西行殿が東下りの折、此地に立寄り鴫立澤の秋の夕暮と歌を詠まれた時に忘れ玉ひし杖でござると効能書を長々しく陳べ立てる。隱居は此杖を見て吃驚仰天したが、

これは斯く申す拙者が先年此處に忘れて置いた杖にて候ともいはれず、心中には馬鹿々々しいやら可笑しいやらで、己が杖を十二文づゝ出して一同に拜ませたといふことである。

寶物の種を明すと大概似たり寄つたりである。拜ませる奴は圖々しいが、拜ませらるゝ者もまたこけの骨頂といはねばならぬ。國寶であるとか、歴史付の名品であるとかはさう手輕に見せるものではない。端た錢を出して長々しい緣起などを述べ立てゝ見せる物に正眞正銘のものはまあないと云つてよい。

第十四　男伊達

男伊達も以前は腕力を要した。弱いもの虐めをする世の中に、弱い者を助けようとするには是非とも腕力が必要であつた。然し後世になつて、黄金萬能になると、腕力だけでは効が無い。金力の男伊達が自ら生ずる譯である。

大口屋曉雨は花川戸助六のモデルの樣に傳へられてゐる男氣のあつた人で、力もあつた樣に、多く物の本に見えて居る。或る時、町内の錢湯に浴衣を抱へ、下駄を穿いて出懸けると、我が家から五六軒先の路次口で、大道搗が米を搗いて居た。何氣なく其前を通ると、小糠がぱつと小袖にかゝつた。米搗は知らぬ顔で依然として米を搗く。曉雨立腹してつと近寄り

『これこゝな奴め、此の曉雨を知らぬか。我が袖へ糠をかけ

置き乍ら挨拶もせずに、其の儘居るとは、不屈至極。』

と言ひ乍ら米搗きの首筋捉へて、臼の中へ押しこめ、杵を振上げて打殺さんとする。

『まあ〳〵御待ち下されませ。』

と、町内の者共立ち出でゝ、只管に詫言したから曉雨も詮方なく、

『さらば今度は見のがして遣はす、以後たしなみ居らう。』

と其儘錢湯へ往つた。

此の話で見ると曉雨は隨分亂暴者である。藏前の札差中でも殊に異彩を放つた曉雨としては甚だ感服し難い。然し此の傳說が果して事實か如何かは譯らぬけれども、此の話を傳へ

た書物の作者は「此の曉翁至つて大力にて、此の時代迄は元祿の頃の暴風遺り、わけて其のうちに藏前者は何れも男伊達の風俗殘りたるは土地柄ならん」と云つて居る。

恰度曉雨が其頃の風俗とて花街に出入した時、穢多の粂八といふ者、美しい小袖を着し、盛に金を撒き散らし、人も無げなる振舞するを、曉雨憎しと見て、粂八が通れる折、

『おう臭い〳〵。』

と喚く。粂八立留り、氣色を變へて

『我れ等が臭う御座るか。』

と言ひ蒐かる。曉雨あざわらつて、

『如何にも臭いから臭いと云つた。しかもたゞの匂ひでは無

い、人間の香ひでもない、癩病やみか、穢多の匂ひがする。』

といふを俟たず、粂八刀に手を掛ける。暁雨、庭にありたる下駄を隻手にもち、隻手にて粂八を曳き寄せ、

『日頃から推參なりと思つて居たれど、其折が無いから、今日まで許し置いたが、今日は百年目、覺悟しろ。』

と、取つて伏せ、續けざまに下駄にて散々に打つ。粂八も大力であつたが、暁雨の大力には叶はず、強たかに打たれた。粂八の徒も、暁雨の勇氣に恐れて散々に追ひ散らされる。

『打ち殺しても足りない奴だが助けて遣はす。還れ、二度と大門をまたぐな、またがば此暁雨が一打に打殺すぞ。』

と手を放つ。粂八は這々の態で遁げ出したが、土手に同勢と

待伏する。人のとめるをも聞かず、土手八丁を戻らんとする暁雨は恐れず、

『あゝら不思議や、此土手に何やら臭い匂ひがする、正しくこれは穢多の匂ひである。粂八奴が宵の仕返しに待伏するのであらう、さあ出よ、踏み殺してやらう。』

と高聲に呼ばゝり、高下駄穿きながら、懐手にて突ッ立ッた る其氣色は、如何なる天魔鬼神なりとも恐れつべうと見えたるに、粂八は度膽を抜かれ其儘こそ〳〵と逃げ去つたといふ。

此話も果して充分に信が置かれるであらうか。或時暁雨が仲の町にて亂暴者を取挫いだ事がある。大力な亂暴者が犬ころの如く、暁雨のなすがまゝに、素直になつてゐたが、これ

は曉雨がそつと金子を其手にとらせてそれで取挫いだのだといふ事がある書に見えてゐた。恐らくは是が曉雨の正眞の藝當ではあるまいか。曉雨は腕力を以て男伊達をしたよりは寧ろ金力を以て任俠を行つたといふのが、實説であらう。

此曉雨は脚本の俠客春雨傘の主人公となりて、助六の向ふを張つてゐるが、とにかく商人道の俠客肌をあらはして、江戸ッ子の爲に夥しく氣焰を揚げてゐる。彼は藏前風の代表者で、札差仲間も彼を得て、千鈞の力があると云つてよい。曉雨は晩年家を讓つて、自らは曉翁と稱し、男の中の男一匹として、世を過したのであつた。

第十五　俳句の徳

和泉式部は和歌の徳によりて甘雨を降らせたといひ、其角は夕立やの一句に八大龍王を感せしめたといひ傳らる。かうなると文藝の徳も偉大なるもので、自然界を左右するのである。

日蓮上人は良觀が肝膽を碎いて祈り禱つたが其効絶えてあらざるを見て、大に怒を嘲けつた。眞實傳や其他の俗書に據ると上人自ら良觀に代つて雨乞ひをした處が直に其効驗があつたかの樣に傳へてゐるが、御遺文に據ると、さういふ事は見えてゐぬ。上人は其のやうな手品遣のやうな事は勿論なされなかつたであらう。誠は天の道也、誠を思ふは人の道也

で、至誠にして動かざるものは無いではあるが、己の德、己の力ならば神も納受をなされるだらうなどとの自惚心を以てしたものを何で神が受けよう。

芭角といふ俳諧の宗匠、一日舟にて隅田川を往く。此舟の船頭は兼ねて相識の間であつたから、宗匠に向つて謂ふには私事近頃瘧に惱んで難儀を致して居まする、宗匠は俳諧に名ある御方であれば、どうか君の一句もて我が瘧を落し給へ。これは迷惑な事を聞くものかな、昔の其角は此の邊にて俳句の力もて雨を降らせたと言ひ傳へ、又世間にはいろ〳〵の珍らしい奇特の話もあれど、夫れは物に妙を得た人の事で、拙者如き下手なものゝ出來る業ではないと、流石は此宗匠自分

を能く知つてゐたから斷る。

それは餘りに御謙遜で御座りまする、君が俳諧に名を得たるは諸人の知る所、私如き賤しい者の病を直すは何でも御座りますまい、是非に是非に、と船頭は請て已まぬ。そのうちに舟が岸に着かうとする。宗匠立上り樣に拳を固めで船頭の背中を唐突にいやといふ程擲つた。船頭驚いて振り向くと宗匠したり顏に、お前の瘧は最早落ちたといふ。船頭立腹して之は思ひも寄らぬ仰せで御座る、瘧が落ちたからとて人を打つ事が御座らうか、句をば願つたので、打つことは願ひませぬ、といきまくと、宗匠は泰然として、何もうそれで落ちた、皇帝の船のおこりは落葉哉

此の句をよく〳〵信じて毎日一心に祈りなさいと云つて其儘別れた。すると其後船頭が宗匠の家を訪ねて、先日君の名句を頂戴して其お蔭にて瘧がすつかり落ちました、悦びの餘りに今日は其御禮に參りましたといふ。宗匠可笑しくてたまらなかつたが、それはよかつたと答へて歸したといふ。

此の宗匠は俳句よりも頓智の方が勝れてゐる。船の起原と病の瘧とを引つかけたなど三題噺にでもありさうなやうな駄句を以て胡魔化したが、背中を打つた頓智は遙に俳句以上である。偶然の結果で其人の和歌や俳諧の德を稱せらるゝよりは此方が確かで、安全で、効能がある。此の宗匠は定めし處世術にも長じてゐたことであらう。

第十六　美人薄命

王昭君が胡國に嫁したのは、漢室の帝國主義實現の一端とでも云はうか。政策の犧牲になつた王昭君こそ好い面の皮である。尤も其面の皮も、王昭君が吝で、畫工に賄賂を使はなかつたが爲に折角の美人が醜婦に畫かれて、とうとう人選されたのだと云ふことだ。けれども氣の毒千萬のことであるから、當時の人、若くは後代の詩人畫家は同情を寄せて、限りなき哀愁を其詩に其畫に寄せてゐる。されば後世永く好詩題となり、好畫題とはなつたものゝ、昭君當時の心情は如何にも憫然であつた。漢の朝廷から云つても決して賞めたことゝ

は云はれない、昭君も畫題詩題となるよりは一生を中國に送りたかつたであらう。

王昭君は漢書の註に依ると、蜀郡秭歸の人とある。蜀には由來美人が出たと見えて、司馬相如の夫人となつた文君も、唐の楊貴妃も蜀の生れであつた。昭君の生れは決してやんごとない金枝玉葉でも何でもなかつた。昭君のことを書いたものは、西京雜記であるが、世に漢の元帝に上つたと云ふ書を二通傳へて居る。其の後人の僞作たることは又疑ふべからざるものであるが、多少の心事を寫してゐる點もあらう。又胡地には青塚と云ふところがあつて、杜少陵の詩にも、一去紫臺連朔漠、獨留青塚向黃昏とある。此の青塚と云ふ名の起つた

のは、歸州圖經に、邊地には白草多けれども、昭君の塚は獨り青いと云ふ、それから出たと云ふことである。けれども昭君が胡國に嫁しての後の經歷は甚だ感服しない點が多くて、折角の昭君怨だの、馬上琵琶の斷腸曲だのが汚れるやうな心地がする。實際の史蹟は知らぬ顏で、あれは藝術に一任して穿鑿無用の方がよからう。羽衣傳說も謠曲のやうにすると美的であるが、漁夫の子を生んだとすると、折角の天女を臺なしにする。まして昭君には面白くもない再嫁のことがあつて、平凡以下に落ちてゐるのである。

楊貴妃は昭君にもまして不幸な最期を遂てゐる。けれども享年は三十八歲であるから、もういゝ加減の大年增で、縮緬

皺のよつてゐる方だ。尤も肉感的の豐肌であつたから、まださう衰へもしてゐなかつたらうが、楊貴妃と聞くと二十歳前後の新造のやうに思はれるのは畢竟美色の名のお蔭である。

常磐御前の晩年のことは、正史にも演義物にも見えないが、信長記に、磨針峠で殺された話が載つてゐる。事實かどうだかは明瞭を缺くが、妙な傳說もあつたものだ。しかも其殺したものゝ子孫が代々不具で、乞食をしてゐるなどは、一寸かはつてゐる。若之を事實とすると、常磐の齡も楊貴妃と伯仲ぐらゐでゝもあらうか。馬嵬坡の恨は綿々として盡きずあるが、磨針峠の遺恨は祟となつて幾百年も殘つてゐるので、女の執念は流石に恐しい。

淀君の沒年は三十九と傳へられてゐる。楊貴妃の三十八は割合に老婆さんの感じがするが、淀君と云ふと、大阪城の大立者と云ふのが、先入主となつてゐるから、おや〳〵まだそんなに若かつたのかと云ひたくなる。全く秀賴の母としては若後家の方であつた。

蘇格蘭の女王で奇しい運命に遇つたメリーは四十五で死んでゐる。ナポレオンの皇后であつたジョセフインは享年五十一と聞くと、いゝお婆さんであつた。しかし奇蹟家だけにジャンダークは十九歳で殺されたと云はれてゐる。

靜御前も十九歳で世を終つたとある。確かにそれとは知れぬが、多分夭死したことであらう。萬治高尾も十九歳であつ

たと云ふことである。三股川の船の中でばつさりやられたのでもなく、仙臺へ連れられたのでもなく、島田重三郎との情事もなく、萬治二年十二月五日に病死したのである。尤も土手の道哲にある墓には萬治三年十二月二十五日とあるが、之は後人の建てたもので信ずべからず、山谷の春慶院にある方が確かである。高尾のゐた三浦屋の寺は樋寺であるのに、なぜ高尾を春慶院に葬つたかと云ふと、高尾が病氣保養のため春慶院に近い三浦屋の寮に出養生してゐた時、此寺の常念佛の鉦の音あはれに其枕のもとに響くに、高尾も同じく念佛するを常としてゐた。此所縁で、遺言して、遺骸を此寺に埋めてくれよと云つたとかで、此へ葬つたとのことである。高尾

は十一代と云はれてゐるが、取り別け此二代の萬治高尾が名高く、高尾とし云へば、此二代を指すほどである。けれども其一生は僅に十九、まことに短い夢であつた。

吉原燈籠の起源と云はれてゐる中萬字屋の玉菊の歿したのは、二十五歳のときで、水調子にも、二十五絃の曉に、碎けて消ゆる玉菊の、とある。玉菊も燈籠に依つて不朽となり、高尾とゝもに物數奇なる考證家の研究問題となつたほど有名であるが、いづれも美人薄命の嘆は免れない。けれども美人と云ふと、大抵年の相場が極つてゐるから、名の出た時は若い時で、それから後に長生したところが、もう忘れられるか、忘れられるばかりでなく、却て全盛時の名を汚すことが往々

あるやうだ。

笠森おせんも實際は殺されたのでも何でもない。笠森稲荷には今に糠味噌往生などの俗説を傳へてゐるが、あの美人も長命の子澤山で平凡な晩年を送つた樣子である。けれどもおせんは笠森時代のおせんで、飛んだ茶釜が藥罐に化けたとゝもに、其美的生命は終つてゐる。銀杏娘の柳屋お藤の事蹟は皆目分らぬが、之もいづれ圓滿なる家庭で、目出たし〳〵であつたらう。湯島の巫子などになると、一枚繪の外には一切空々寂々である。

しかし概するに美人には薄倖短命が附きまとふやうだ。之れは人間ばかりでなく、生物一般の原則でゝもあらう。けれど美人の瓦全も或意味から云ふと悲慘で、花井お梅も大川端で一段落を告げた方が、美人傳の光彩であつたらう。いゝ年をして、寄席へ出たり、藝者になつたりして、自分の香ばしからぬ經歷を賣物にしようとしてゐたのは、寧ろ薄倖短命以上の悲慘である。して見ると、ぽんた君の苦節は賞すべきであるが、此頃のやうに、隨處に踊り出すのも考へものである。近年の繪葉書名妓萬龍が新愁後の行動はどうあらうとも、美人傳では有髪尼として打切りをしたいものだ。

第十七　大風呂敷

夢窓國師が足利尊氏に敎へた十三ケ條敎訓狀の中に「祿に

隨ひ、物を施し、人間の慾を知り、天道を恐るべきこと」といふ一ケ條がある。然し祿に隨ひ物を施して氣前のよい事は、尊氏の天性であつて、夢窓國師が尊氏の美德を擧げた其の中にも、「御心廣大にして物惜の氣なし、金銀土石をも平均に思召して、武具御馬以下のものを、人々に下し賜ひしに、財と人とを御覽じあへることなく、御手に任せて取りたまひしなり、八月朔日などに諸人の進物其數を知らずありしかども、皆人に下し賜ひし程に夕に何ありとも覺えずとぞ承りし」と讃めて居るほどである。尊氏嘗て高師直及び評定衆を召出して、之に告ぐるに、「當代は人の嘆きなくして天下治まらんこと本意たる間、今度は怨敵をもよくなだめて本領を安堵せし

め、功を致さん輩に於ては殊更莫大の賞を行はるべきなり、此趣を以て扶佐し奉るべき由」を以てした。尊氏は將士の心を收攬するに、惜氣もなく土地金銀を與ふるを專一としたのである。彼れ自らも其御蔭によりて將軍となり、室町幕府を開くを得た。日本の執權者にて氣前のよかつたのは尊氏と秀吉とであつたが、猶秀吉には締括りがあつた。尊氏に至つては殆んど濫授の姿である。此點に往くと尤も吝嗇なのは賴朝で、德川家康などは流石によく考へてゐる。織田信長は勝角力に燒栗を三つ四つ與へたといふ點から吝嗇の樣に思はれてゐるが將士を封ずるには相當に厚くあつた。家康、賴朝はけちだけに自ら奉ずることも薄く、萬事が節儉を旨として、政

治の上には善く締括りをした。そこへ往くと、氣前はよかつたが大風呂敷の尊氏は收拾するの術を全く知らなかつたと云つてよい。

かういふ濫授の結果は足利の中世以後、下剋上の弊を開いて、臣が君を弑し、下が上を蔑ろにするが如き、風敎の紊亂を來した。尊氏からいふとあの位に濫授しなければ自家の位地を獲得し維持することが困難であつたであらう。固より天下の物を私して之を人に與へるのであるから惜氣も何もあつたものではない。當時足利氏に附き隨ふ有象無象のものは此の得分に與らんが爲に附き隨ふので、我利々々亡者の群ばかりであつた。そこへ行くと五十七年の間雲深き吉野の山に侘住居しながら君臣一體、正義の爲に戰つた南朝の君臣は洵に壯烈なもので、我國の名敎はこれによつて維持せられ、國民精神はこれに依りて發揚せられ、天地正大の氣は實に此に寓して居たのである。

尊氏は敗軍の際に往々自殺しやうとしたなどゝ傳へられてゐるが、多くは彼れの狂言に出たもので、嚙り付いたら金輪際離れないといふのが彼れの特色であつた。新田義貞の樣に執着心の薄い、淡白な、俠氣のあつて一身を殉ずることを何とも思はないのとは、全然同日の談でない。是れが義貞の失敗した所以で、尊氏の成功した原因である。然し成功したとて尊氏は尊氏で、失敗したとて義貞は義貞である。

大風呂敷を擴げて締括りの出來なかつた尊氏は我國偉人の一人としては數ふべき者であるが、名敎の罪人としては斷じて許すべからず。偉人の名に眩みて彼が名敎の罪人たるを寛假するのは獨り批判の正鵠を失ふばかりでなく、國家風敎の上に於て大なる弊害を遺すものである。歷史家及び國民敎育家は此點に關して嚴密に公平であらねばならぬ。

第十八　小栗判官

小栗判官、照手姫は芝居の外題となり、操人形の題目となり、今は無いが以前にはからくり覗眼鏡で人氣を博したものだが、事實はどのやうな事があつたであらうか。鎌倉大草紙によると、判官は小次郎といつて、常陸國の住人小栗孫五郎平滿重の子である。應永三十年の春の頃、父滿重は鎌倉に叛いた爲め管領足利持氏は自ら兵を將ゐて結城に動座あり、八月二日から小栗の城を攻める。小栗は防戰力めたけれども終に落城して行方も知らず落ち行つた。此の小栗の城は眞壁郡小栗村に在つて、新編常陸國誌に、「一大圓丘にして面積大略四千坪、小貝川を負ふ。頗る要害の地なり、土壘あり、東北三重、南北五重、本城址方五六十間許、雜木疎生す、大掾重義始めて小栗の地を食み、依りて氏とす、滿重に至りて上杉輝秀に與し、戰敗れ地を失ふ」とあるのが、それである。小栗系圖に從へば小栗氏は平繁盛から出てゐる。繁盛は國香の

子で、平親王將門を平げた貞盛の弟である。但し其の系圖には重義の名が見えぬ。小栗系圖には重能とありて、「平治の合戰の時鵠坂に於て討死」とある。この重能の父は重家、子は重成で、常陸大掾系圖によると、重家の子重義、重義の子重成とあるから重義は卽ち重能であらう。但し常陸大掾系圖は重家の下に小栗五郎、重義の下に同じく五郎とあるによれば、小栗を氏としたのは、重義ではなくて、其父重家を以て初めとしてゐるやうである。此の滿重の子は小次郎助重で父滿重は落城後參州へ落行き、子助重は忍んで關東にあつた。小次郎助重は相州權現堂といふ所に赴きたるに、野武士强盜共の宿とも知らず、其の處に宿を借りた。賊の頭領は手下の者を

集めていふやう、此の浪人は常陸の國の豪家の由聞いた、定めし身に付けたる寶があらう、打殺して奪ひ取らうと存ずる、乍去强さうな家來を從へ居れば如何致さうかといへば、一人の手下が云ふには、何でも御座らぬ、酒に毒を入れて飲ませれば見事往生致すであらう。流石に其方は楠孔明も跣足の智慧者であると、頭領も此の議に同じ、處の遊女どもを聚め、今樣など謠はせて彼の小栗を馳走なし、頻りに酒を進めた。其夜酌人の遊女の中に照姫（照手姫とはない）といふのがあつたが、此日頃小栗と馴れ染めたる女であつたから、賊の計略を知りて、そと小栗に囁きたれば、小栗は飲む樣に見せて少しも飲まず、酒酣なる頃、潛に忍び出で、森の木蔭に行く

と、一匹の鹿毛の馬が繋いである。之は賊共が往來の大名小名の馬を盗み來りたるも、此馬のみは非常な荒馬にて手に負へぬところから此處に繋いで置いたのである。小栗は之を見て立戻り少々許りの財寶を携へ、彼の馬に乘りて一鞭あてると共に塵を蹴立てゝ此の虎口を遁れ出た。小栗は雙び無き馬乘りの名人であつたから流石の荒馬をも思ふがまゝに乘りこなし、片時の間にして藤澤の道場に驅け行き上人を賴む。上人は之を憐れみ僧侶二人を伴けて參州へと送つた。賊どもは毒酒を飲みて醉ひ臥したる小栗の家來及び遊女共を川に流し、財寶を奪取り、小栗を尋ねたるが皆目行方が分らぬ。照姫は毒酒と知りたれば飲みたる風に見せかけ、川に投げらるゝと

共に窃かに川下より這ひ上りて一命を全うした。其後永享の頃ひ小栗は參州より來て照姫を尋ね出し種々の寶を與へ、賊共を探して悉く誅戮した。鎌倉大草紙には「其孫は代々參州に居住すといへり」とあるが、小栗系圖には助重の後が見えぬ。滿重の兄重廣の子孫が連綿としてあつて、重廣の曾孫重昌は參州平田の合戰に討死し、重昌の曾孫正次は生國參州にて將軍德川秀忠に事へたと見えてゐる。

第十九　鈴木石橋

寛政三奇人の一として、勤王論の獅子吼者として、蒲生君平の名を知らぬものは無いが、君平を敎訓し之を指導したる

其の師鈴木石橋の事を傳ふる物は甚だ稀である。藤田幽谷先生が其墓表に誌して「富而樂道、隱居求志、古有斯語矣、先生其庶幾乎」と賛してゐるのは、最もよく石橋を表はしてゐる。石橋は下野國鹿沼の人で、寶暦四年を以て此地に生れた。其里を石橋といふところから、取つて以て其號とした。通稱は四郎兵衛、家は代々農を以て業とし、又時に商を事としたこともある。石橋は江戸に遊んで昌平黌に學んだが、安永八年に鄕里に歸つて、是より諸生を敎授した。其の江戸より還れる時途にて籐の編笠を購ひ之を戴いて歸ると、父は之を見て其贅澤なるを戒めたれば、石橋は笠を取つて棄てゝ復たび戴かなかつたといふ。其儉素なることは父からの感化であつ

た。然し此の儉約なる石橋はよく財を散じて窮民を賑した。

石橋は風俗の頽廢を憂ひて、之を救濟するに於ては其全力を盡した。鰥寡孤獨の無告者を憐れんで之を保護し、或ひは衣服を與へ、或は金錢を資給し、其のある者は幼時より親しく之を薫育した。左れば石橋によりて生活を營む者は五百餘人の多きに至り、其の家には常に數十人の寄食者があつたといふことだ。又道路を開通し、橋梁を架設し、人民の便を圖ることも少くなかつた。石橋の如きは實に鄕先生死して社に祀らるべき人である。

蒲生君平が其門に入つたのは、君平が十四歳の時であつた。君平作る所の詩文を見ると石橋に贈つたものが數多ある。其

中に「職官志今將に彫刻せんとす、先生幸に其志を知る、宜しく其藏する所の貨財を發きて、以て其の費用に資し、志業をして一日も緩まざらしむべくんば、乃ち千歳の奇遇將に悔なからんとす、」とあるを見ると、君平は其の著す所の職官志出版の事を石橋に圖つたのである。

君平嘗て佐渡に赴きて順德天皇の御陵を拜し其荒蕪せるに慨し、悲憤に禁へず、石橋に告げんとて急ぎ歸り來り、途中川を徒渉し、其の裸體なることも打忘れて石橋の門に入り、號泣して之を語つたといふ。君平の勤王心は時勢と天性とに出づるとはいへ、石橋の教訓感化も與つて力あつたのである。君平が山陵志を編述したのも石橋の奬勵に出でたといふことである。

此の隱居して道を樂んだる石橋先生は文化十二年二月二十五日、六十二歳を以て歿した。其著書は少からねども、其の性の謙遜なる、概ね之を上梓せず、稿本として家に藏してゐる。今鹿沼の鈴木氏に之を傳襲してゐるが、歳月の久しき、蠹魚の蝕する所とならんとするは甚だ惜むべき事である。一昨々年は先生の百年に當れるを以て鹿沼の有志に祭典を擧行するとの企てがあつたが、昭憲皇太后の御大喪に際して延期する事となつた。當時此の鄕先生の遺墨の一部は予の家に送られて親しく之に接し、先生の遺風を想望したのであつた。何とかして斯かる遺稿は之を世に公にし、永く此の先生を記

念して置きたいものだと思つてゐる。

第二十　車善七

車善七は佐竹氏の勇士車丹波守猛虎の弟である。但し一説には猛虎の弟の子とも云つてある。猛虎は佐竹氏に事へ、大戰小戰十數度の役に從ひて屢奇功を奏した。慶長七年關ヶ原役後の處分として、佐竹義宣が西軍に與したるの故を以て德川家康は佐竹氏の領地常陸を奪ひ之を秋田に移した。義宣は命を奉じて北行したが、多數の家人郎黨は猶淹まつて常陸にゐた。德川氏は使を遣して水戸太田の諸城を收めしむるに當り、當時佐竹義宣の父義重は太田に在つたが、猛虎は之に勸

むるに兵を擧げて死守せん事を以てした。義重應ぜずして急に秋田に赴いたから、猛虎は竊に國中に唱へ、水戸城を回復せん事を謀つた。謀漏るゝに及び、猛虎は三百の兵を將ゐて水戸城下に迫つたが、衆寡敵せずして終に德川氏の獲る所となつて磔殺せられたのである。

善七も此擧に與したが、遁れて江戸に奔り、姓名を變じて草履取となり、將軍秀忠を刺殺さんと、其の機會を窺つた。しかし事顯はれて終に縛に就いたから、秀忠は親ら之を問ひ詰ると、善七少しも怯びれず、某が將軍をつけ覗つて、手を下さんとした事は玆に三たびにて候、然れども將軍は天授にして人力の能く及ぶ所にても候はねば、はや〳〵某を殺した

まへといふ。將軍は其志を嘉して今より後改めて予に事ふれば一命を助け遣さんといふ。善七は某既に將軍を仇とし、つけ覗ひ候へば、よしや恩命を蒙るとも志を飜して仇に事ふる事は御免候へ、寧ろ死するが望みにて候ふと申す。さらば去就は汝が心に任せんとて、將軍は之を殺すに忍びなかつた。善七辱なしとて禮を述べ、某事を御助け下さらば、是より乞丐の頭となり餘生を送らんと存じまする。聞く將軍は之を許して、願ひの通り乞丐の親分とした。

善七年老いて將に病んで歿せんとする時、其子息を枕邊に呼び一書を出し之に示していふには、是れ予が手下の名簿である、今は天下泰平となり浪人共跡を潜むる所なく、流れ流

れて乞丐となれる者も少からぬ、某其者共の才能を見て部署を定め、或は五十人を一組とし、或は百人を一組として、各彼等を其長としておいた、此者共は凡そ五六千人にもならうか、某は將軍を仇としつけ睨つたるに、將軍は却て某の命をお助けなされた、此恩何時の世にかは報せねばならぬ、若し天下に一朝事有らば某は此者共を驅りて戰場に馳せ向ひ、屍を馬革に裹む積りであつたが、泰平の今の世それも空しく水の泡となつた、さらば此名簿も何の用に立たうぞ、たゞ汝に見せ置けば乃父の志を心に銘じ置けよ、と其書を取つて之を火中に投げ入れた。

車善七に關した話は諸書異同有つて何れが正しきやを知ら

ぬ。如上の話も果して事實であつたかどうか、何の邊までが事實であつて信ずべきかどうか、甚だ明瞭を缺いてゐる。車善七だの、彈左衞門だの、首切淺右衞門だのは、江戸市井史の中に於ても特色あるだけに極めて異說が多い。

第二十一　王子の狐

王子稻荷の近くに裝束畠といふのがあつて、畠中に立てる一本の榎を衣裳榎と稱へる。毎年十二月晦日の夜には、諸方の狐此處に集つて其の燈す灯は、松明を並ぶるが如く、數萬の螢を放つたかの樣で、土地の人は其の灯影の多少によりて、翌年の豐凶を占ふと云ふ。眉毛に唾をつけて聞くべき話であるが、江戸名所圖繪にも誠らしく記載されてゐる。或時身裝の賤しからぬ一人の侍、股を高くはしよつて此の裝束畠の泥田の中を行きつ戻りつしてゐる。

『おや彼のお侍は何をしてゐるのか知らん。』

と折りしも飛鳥山の遊山戻りの一人が訝かしく思ひ乍ら、此の狀を見物する。

『どうも變だぜ。』

一人が立ち止ると二人が立ち止る。三人五人十人と次第に不審がつて、見物は段々增して來る。

『狐につまゝれたのだらうぜ。』

『日も暮ぬいのに化されたのか。』

『可笑しな足付だぜ。』

『こいつあ餘程面白いや。』

『いゝ見せ物だ。』

見物が次第に加はると共に、お馴評が愈喧ましい。たゞわや〳〵と言ひのゝしるだけで、見せ物氣どりでゐる。けれど中には氣の毒がつて、

『見つとも無いや、何とか知らせてやる工夫は無からうか。』

『氣の毒千萬だ、お武家ともあらう者があの狀では、人目がわるい、大きな聲でも出して、氣を付けてやらうぢや無いか。』

などゝ氣を揉む者もあつた。

暫らく泥田の中を歩きまはつてゐた侍は、やがて泥田から

上り、小流れで足を洗ひ、大勢の見物の方へやつて來た。

『お前方はどうしてそんなに大勢そこでわや〳〵言つてゐるのか。此の邊には狐が澤山居ると言ふが、お前方は何かその魅まれて居るのぢやないか。』

『はゝあ大將やつと氣が付いたと見える。自分が見物されてゐるのを知らないなどは、いゝ氣なもんだ。』

と大勢は可笑しがる。侍はじろ〳〵と大勢を見乍ら、

『私は近頃足に雁瘡が出來て難澁致して居る。雁瘡は蛭に吸はせるのが一番いゝと聞いて、今日は此の泥田の中で思ふさま吸はせたから大變氣持がよくなつた。見られよ、この樣に出血致し居る。』

と足をまくつて見せる。何の事だ、さてはさうであつたかと始めて知つた見物の有象無象は急に氣まりが惡くなつて、一人減り二人減り五人十人と減つて、遂々一人も居なくなる。

跡には夕暮の淡ら寒い風が吹く。

岡目八目と言ふこともあるが、批評の正鵠を得ざる、往々此の類がある。化されて居ると見た者共が却て自ら化され、人を笑つた者が却て人に笑はれる。

第二十二　人物養成

荻生徂徠の門には桃李滿つといふ有樣で、太宰春臺や服部南郭やを初めとして、識見を以て、博學を以て、詩文を以て

世に著はれたものが多くあつた。これは徂徠の大なる所で、才を愛することは漁色よりも甚しかつた。菅麟嶼は秀でゝ實らなかつたが、其才は夙く徂徠の認むる所となつた。水足平之進が十六歳の時徂徠に書を寄せたところが、徂徠之を見て悅ぶこと甚だしく、得々として人に示して其才を絶賞した。或人其文を見て、これは文字にも顚倒有つて未だ至らぬものであると評した處が、徂徠は色を變じて、左樣な事をいふものでは無い、顚倒などは年の往かぬ時には有りがちである、何の妨げにならう、此の見識の勝れたることは誰れか及ぶ者があらうか、と言を盡して讃めた。春臺や南郭は中々人を賞めぬ性であつたから徂徠の如く弟子はなかつた。春臺の說では、

才あるものゝ學問するを讃めるのは決して其人を向上せしむべき道ではない、却て人を害するものであるといつて讃めなかつた。南郭は、また兎角人を引立てゝ學問をさせる先生もあるが、それは衆生を濟度する如來の樣なものである、拙者の如き引込思案のものは到底才を育することは出來ぬから、その者の儘におくのである、と言てゐた。春臺は弟子を取る時には殊の外六ケしく、行ひのなき者を門人の列に置くことは耻であると稱してゐた。それで春臺の門人たる資格はおとなしい、穩かな、人格のよいものを專一とした。そこへ行くと徂徠の如きは清濁併せ呑むの大度量があつた。

徂徠は多くの弟子を引立てた人であつたから、よく人の長

所短所を見拔いてゐた。春臺が初めて徂徠に面會した時に、其の作る所の詩文を出して見せた。徂徠之を披閲して、足下は詩文に於て既に一家をなしてゐる、經學を修めたがよからうといつた。徂徠は豪傑の士である。自ら神武以來第一人と稱してゐる程であるから、とにかく識見は高くあつた。春臺南郭の教育法は弟子を箱の中に入れ置く樣な主義で、弟子は我が思ふ通りにしなければ氣が濟まない遣り方であつて、南郭の社中は南郭の眞似をして、自ら高く標するを旨とし、一向に學問を磨かなかつたと云ふことだ。徂徠と、春臺、南郭との才の大小はこれ等に依つても分明である。

徂徠、人物養成の法についていふ、「たゞ其人を眺め居て其

長所を知らんとする故、一生眺めても見えぬ也、人は活物なり、過ぎし昔を見て其人を知り究むることあるべからず、用ゐて見れば長所は顯はるゝものなり、委任すれば長所は益働きて今までなき才智も生ずるは活物なる故、人君の用ゐ樣に依て人才を養ひ成し、器量の人出來るなり、我れと我が身にても我が才の長所を知らぬは用ゐて見ぬ故なり、況して人の才能を用ゐずして知らんとするは神通を得んと願ふに似たり、愚なるの甚しきにあらずや」と。流石に彼は豆を嚙んで英雄を罵しるだけのことはあつた。殘念ながら今の學者には、これ程の人物養成の見識を持つた者がない。

第二十三　春臺の煎海鼠

寺社奉行井上河内守より太宰春臺に琴のことに就き尋ねたき由、指紙を以て呼びに來た。春臺憤然として某は樂人にあらずとて之に應ぜぬ。其後河内守の邸に至り、某は樂人に候はぬ故、樂の事は申上る事叶はず、但し文學のことを御尋ねなされ候はゞ申上べしといふ。河内守の用人も尤もなりとて其儘になつた。また或時側衆加納遠江守より書林須原屋新兵衛を以て春臺へ經濟學を一覽したし、實は將軍の御覽に供すべきものとのことを申し越した。春臺答ふるには、鄙人の著述を上覽に供へることは有り難う御座る、併し胡亂に書付け

たもの故、清書致して差上る筈なれども、老衰致して其儀も叶ひませぬときつぱり斷つた。これは加納遠江守が將軍吉宗の側衆であるから、内官によりて物を差上ることはしまい、執政からの命ならば出さうといふ意見であつた。

老中本多中務大輔忠良から春臺へ煎海鼠一箱を下された。春臺之を料理したるに、腐敗して食ふに堪へず。例の氣象として直樣本多の役人へ煎海鼠を突き戻し、書面を以て申すやう、某事は鄙人なること論に及ばず、されども此品は聖人の道を御質問なさらんが爲に御送り下されたのであらう、然るに斯樣な粗末なる御贈品はこれ聖人の道を輕んじたまふとも稱すべきもの故返上致すのでござると言ひおくつた。驚いたのは

本多の役人、何分の返事は當方より致すで御座らう故、兎も角其儘歸つて呉れと使者に言つたが、此の使の者が主人に似た鯁骨漢で、中々はい左樣ならとは歸らず。主人の申し付けまするには御返答を取り還れとの事で御座りまする、御返答を頂戴せぬうちは歸りませぬ、いつまでも御待ち申すも苦しからず、と更に動く氣色も見えぬ。役人困じ果てゝ此旨を中務大輔に言上すると、中務大輔も大に困却し、色々詫言いひて、更めて腐らない煎海鼠を送つた。

春臺は嚴格な人で、至誠を積むことを力めた。故に人を感化する力があつて、其家人の如きは皆春臺に化せられ、春臺を見ること聖人の如くであつたと云ふ。其多藝なる、徂徠の

無器用とは事異つて、笛をよくし、琴をよくし、舞樂までも稽古した。殊に勢力絶倫であつたが爲め此等の諸藝も必ず堂室に入つた。其の音樂に堪能なるは必ずしも其の器用な爲めばかりではない、春臺は大の禮樂論者であつたから、自ら之を實行したのである。禮にやかましいのも、一つは禮樂論から出てゐるのである。其の説に「たゞ平生に天を敬ひ罪を恐れ、禮義を守り仁德を行ふ、これ卽ち君子の祈禱なり」といひ、「義といふは先王の義なり、吾人の自己の心にて料簡する義にはあらず、先王の義は禮の中に存するなり」といひ、義を以て事を制し、禮を以て心を制すといふ事を以て其安心立命としてゐた。其の權貴に媚びず、昂々として自ら執つて動

かざるは、全く此の信念の堅きによる。

古の學者には磨せず、變せざる鯁骨があつて、賴もしくあつた。今人稀れに一片耿々の念ある者を見ると、群俗の徒、稱して、變人といひ、賣名といふは甚だ以て怪しからぬ事で、偶彼等群俗の群俗たる所以を告白するに過ぎぬ。我等は今の世に於て所謂變人、所謂賣名の徒の一人にても多からんことを切望する。

第二十四　豫言

喜三二の長生見度記に、正月の三つある年といふ事があるが、陰曆に、陽曆に、おまけに折衷曆があつて、今以て處々

によりて勝手な暦を用つてゐる時節には、正月の三つも珍らしくは無い。歳暮になると、九星の暦を賣つたり、出入の商人から年玉に九星暦を持つて來る樣では、陰暦や九星も決して下火ではない。尤も結婚だの、葬式だのには中々是が用に立つ。殊に一番かういふことに淡白でありさうな東京に、迷信が最も盛んである。近來は其傾向が最も凄じい。家相、方角は固より、加持祈禱さま〳〵の事が行はれて、到る處に此の信者が多い。生活が困難になればなる程此の傾向は加はるばかりだ。尤も高等學校の入學志願者が試驗前にそつと高等學校内の小石を拾つて來て机の上に置いておくと大願成就するなどゝいふ世の中である。此なると鼠小僧の墓石以上であ

る。

同じ書に相撲があると兎角雨が降る故、雨の漏らぬ樣に芝居を立て、雨天三十日興行するといふ豫言は見事に適中して國技館の建設となつた。けれども寫眞もない世の中であるから、流石に活動寫眞などには氣が付かない。況や連鎖劇に於てをや。

端午の幟を座敷へ飾るといふことを珍らしさうに豫言してゐるが、五月の節句は次第に座敷飾りとなつて、矢車や、吹流しの勇ましい音が大空に響き渡り、五月の鯉が三十六鱗の姿凛々しく、日本男兒の生育を祝ぐ狀は減つて來た。妹めが幟をいぢりたがるには困りますといつたのは現在の實況であ

る。

高輪の海手新地が出來て、高輪の茶屋兩側となり、向ふがつかへて暑がるといふ豫言も見事に中つてゐる。東京は山の手、近郊に擴がるを以て足れりとせず、海手にまで擴がつて、依然として其の開基當時の植民地的色彩を發揮してゐる。

長生見度記の出板以前に戀川春町の楠無益委記があつて、とても出來ない相談の樣な豫言をしてゐるが、その中には隨分中つてゐるものもある。四手車出來る、急ぐ時は油代をはづむとあるが、流石に春町も後世人力車が出來るのみか、自動車電車にまで及んだ事は到底夢想することが出來なかつた。春町いふ、猫も杓子も藝者となると。註に曰く、杓子さんは

一本足でさぞちよつちよと轉びなさらうと。一本足の杓子さんは到る處にある、決して惡洒落では無い。安永天明頃の太平時代の通人が洒落半分の豫言は案外に着々適中してゐるのも妙である。菅茶山の筆のすさびにある失敗の飛行家は、我國に於ける飛行家の先驅者であつた。物質的文明の進歩は殆んど底止する事を知らぬ現代であるから、今日では呑氣な閑人も豫言は仕惡からう。尤も今の世には豫言者を標榜する者も尠くない。聖德太子の未來記は楠木正成を啓發したといふ事であるが、昔の閑人の呑氣な豫言の適中したのもまた一興である。

第二十五　逸話

逸事逸話といふものは、兎角混同し易いものだ。偉人の傳記は雪達磨を轉がすが如く、次第に他人の傳記をも其周圍に附け加へる。であるから逸事逸話を記述せんとするには、研究して取捨せねばならぬ。日本武尊が出雲建を殺さうとなされた時に赤樹で僞せ太刀を御作りなされ、それを腰に挾んで出雲建と簸川で水浴をなされた。尊は出雲建より先に川から御上りなされ、建が脱ぎ棄て置いた太刀を御佩きなされ、お前と太刀を交換しようと仰られた。建は川から上つて、尊の僞せ太刀を、それとは知らずに帶びた。いざ勝負しようと尊

は建に向つてお挑みなされる。双方太刀を拔いた時に出雲建は僞せ太刀を拔く事が出來ぬ。尊は太刀を拔いて出雲建をお殺しなさつた。其の時の御歌にいふ「八雲さす出雲建が佩け・る太刀黑葛さはまき眞身なしにあはれ」と。此傳說は古事記に載せてあるが、日本書紀には同じ話を、出雲振根と其弟の飯入根の事にしてある。この兩人は兄弟ではあるが、甚だ仲が惡く、兄は弟を殺さんとし、弟を欺いて止屋の淵に藻が澤山生えてゐるから、一所に見に行かうではないかと伴れ出した。兄は兼ねく木刀を造りて、之を眞の刀に見せかけ、此時それを佩て行つた。淵に到着すると、兄は弟に向ひ、淵の水が如何にも清くて凉しさうであるから、お前と一所に泳が

うではないかといへば、弟もこれに同じて、各帶べる太刀を脱ぎ棄てゝ水の中へ入つた。兄は先づ陸に躍り上りて、弟の太刀をとつて身につける。弟かくと見て、驚いて躍り上り、兄の木刀を取つて互に打合つたれど、固より木刀であるから拔く事が叶はぬ。それで遂に兄の爲に殺された。時の人憐れんで之を歌つた。其歌が八雲さす云々の歌である、と記されてある。畢竟同一の事件が二樣に傳へられてあるのである。其の何れを以て眞とすべきかは考證するに難くはあるが、日本書紀の方が正しくはあるまいか。日本武尊が偉大であらせられ給ふだけ、他の傳說をも其傳記中に混同して傳へられたのではあるまいか。

同じ尊が伊吹山中の癘氣にお觸れなされて御病氣となり伊勢の能褒野に御到着なされた時に、故郷なる大和の事を思し出でられて、歌をお詠みなされた。其一に曰ふ、「大和は國のまほろば、たゝなづく、青垣山、隱れる大和とし愛はし。」其二に曰ふ、「命の全けむ人はたゝみこも、平群の山の隱白樹が葉を、髻草に挿せ其兒。」この御歌を國思歌といふ。またお歌ひなされた歌に曰ふ、「はしけやし吾家の方よ雲井立ち來も。」之を片歌といふ。此事も書紀と古事記とは異なつてゐる。書紀に依ると景行天皇が熊襲御征伐の時小湯縣の丹裳の小野に行幸なされ、野中に立てる大石に登り給ひ京都を念うて御歌ひなされたとしてある。然も以上の三首の歌を一ッにして、

はしけしの歌から大和は國のまほろばの歌に續き、命の全けむ人はの歌が其後についてゐる。この歌を國思歌といつてある。この兩者の何れが正しいかは判斷するに容易でない。何れかゞ正しくて、他の傳說に混同して居るといふだけはわかる。傳說の混同は傳記に於て免れ難い事であるから、傳記家は餘程取調べて研究して見なければならぬ。輕卒に採用すると飛んでもない間違ひが生ずる。

近來諸種の傳記が編述せられ、未知の事實が公になるのは、甚だ悅ばしい事であるが、其人の逸事逸話になると、案外に耳新しい事でなくて、既に他人の逸事逸話として聞き及んだものゝ混同してゐるのを尠からず發見する。恐らくは傳記家

が古來よりの言ひ傳へを研究もせずに、其儘採用したから玉石混合になつたのであらう。殊に禪味がかつた話には此種のものが、最も多いやうだ。出處のあるものは其間に眞贋を區別することが容易に出來るけれども、中には出處の曖昧で、批判の困難な者も少からずある。傳記を讀む際には常に五里霧中に彷徨する感を持つ。

由井正雪が紀伊大納言の家臣と號して、旅行をなし、大納言の仰せと稱し、判形を似せて、謀書を認めたるが爲に、累を大納言に及ぼした。老中共何れも一大事の起りけるよと晝夜密談有つて大納言の登城を求めた。此の時松平信綱がすると大納言の膝元近くへ進み寄り、世にいたづら者ありて、

斯くの如く謀書して御難題をかけんと謀りて候ふ、其御判形御覧あるべしとて、大納言の眼の前に謀書をつきつける。大納言の面色は少しも變ぜず、全く承知のない様子と見て信綱は面色を和げ、此の書は全く贋物にて候ふ可し、御判も平日用ゐたまふ御墨色とは大に違ひ候ふ、斯様な反古は焼き棄つべきものとて即座に引き破り、さて御判形は御身近く候ふ人人にも御油斷なきこと、肝要にこそ候へと挨拶する。大納言曰ふやう、此判形の書は聊かも覺え無し。然れども判形ある上は其許の申す如く近習の者でも向後は油斷なり難しと、扈從中の詰め居る方を打ち見やると、加納某といふ若人、つと縁に立つよと見えたが其儘切腹した。これにて紀伊大納言頼

宣の嫌疑は事なく霽れた。

以上は信綱の言行錄なる事語繼志錄に見えてゐるが、酒井空印言行錄には讃岐守のことしてある。信綱も智慧伊豆として逸事逸話の多かつた人であるから、此人の傳記の内にも他人の逸事逸話が隨分加はつて居るかの様に見受けられる。但し此話は紀伊大納言の言行錄なる紀州言行錄一名南龍言行錄とは大分相違がある。此の言行錄によると、大納言は彼の判行押したる謀書を殘らず披見あつて打解けたる顏色にて、さて〳〵目出度御事にて御座る、最早御氣遣ひは御座るまい、故如何にとなれば彼の黨人原、萬一外様大名の判を似せ謀書致したとならば、三代の御恩を忘れ氣の狂ひたるものが、逆

心を企てたるよと御疑ひもあらうが、我等の判を似せ、逆心と僞りたる上は、上の御氣遣は少しも御座るまい、左樣に候はば無事に相濟み申し候ふ、但し御幼少の公方樣にて猶御疑ひもあらば、我等只今國を差上げ、思召次第に罷り成らう、然らば少しの御氣遣も無之、さて〳〵天下安全の基、目出度御事と喜悅の色にて挨拶すれば、皆々一同に感じ入り、事なく落着したといふ。

何れの傳記も其の本人を主とするものであるから同事件に對して、彼此參看すると、其間に異同は免れない。逸事逸話として傳へられた事が案外に其當人の事ではなく、他人の傳說や、また傳記家の誇張に出でたのが混入されてゐる場合が

少くない。傳記家たるものも亦難く、讀む者もまた困難である。

第二十六　孃樣藝術

現代の東京畫家の中で市價の優れて高いは、野口小蘋女史である。此人の畫は千篇一律の型に箝つたものであるが、上品で、調子の柔い所が、世間に歡迎さるゝのであらう。併し若し其の作品の展觀をしたならば、百幅千幅一樣であつて、變化の乏しいのに失望しないかの疑ひがある。併し明治の始めに大膽なる、豪放なる手法を以て當時の畫界に濶步した奥原晴湖とはいゝ對照で、一は粗笨、一は細緻、一は大膽、一

は小心である。尤も晩年の晴湖は餘程畫風も穩健になつて、前日の風とは一變したが、それでも晴湖には晴湖風の處がある。小蘋は著しく進歩はして來たが、初めより其の執る所の道は一筋である。けれども閨秀畫家中にこれだけの大家のあるといふことは、我が藝術史に於て珍とすべきである。

一體我が文學界では、閨秀作家其人に乏しくない。平安朝時代の文學は、殆んど巾幗者流の獨占であつた。紫式部の如きは、之を世界の文壇上に出しても閨秀作家の隨一と謂つてよろしい。明治年間に於ける樋口一葉の如きも我が文學史の誇りとすべきものである。其他紅紫絢爛として、閨秀作家は我が文壇の隨時隨所に顯はれてゐる。然るに我が藝術界では

婦人の勢力は甚だ萎靡して振はない。時代を代表すべき閨秀畫家のなかつたばかりでは無く、これといふ閨秀畫家が無といつてよい。閨秀畫家の作品として、傳ふべきものが果して有るかどうか。平清盛の娘達は繪に巧者であつて、嚴島經卷だの、扇面古寫經だのに、丹青の妙技を發揮してゐるが、これとても實はお嬢樣の餘技品に過ぎぬ。この以前にあつては天平時代に中將姫が當麻寺の曼陀羅を畫き織つたと言はれてゐるが、これも一種の傳說であつて確たる證據は無い。平安朝にては繪を習ふといふ事が、一種の家庭教育で、貴婦人社會では當然爲すべき仕事であつた。丁度刺繍や、生花や、琴や、茶の湯をやると同樣なお嬢樣藝であつた。平家の娘達が

繪に堪能であつたといふのも、畢竟、平安朝の脈を承け繼いであるのである。されば當時の有名なる女を記述した文章の中には、繪をかき、歌を詠み、花を結び、手を美しくかくと記されてある。卽ち繪事はこれ等貴婦人の當然なすべき一種の藝當であつたものだ。併し平家の女流畫家以外に於ては、殆んど其遺品すら現存してゐぬ。他の文學の作物が幾多傳はつてゐるにも似ず、何等見るべきものが無いのは、畢竟、遊戲三昧の仕事であつたからであらう。

土佐繪の盛行した時代には美しい色彩や、優しい筆致が、女の習ふに應はしくあつた。けれども、宋元時代の影響を受けて、墨繪が流行し、道釋人物や、山水やを主題とする繪畫

の行はれた東山時代になると、女は全く後素に與らなくなつた。これは婦人が宋元の思潮や、文物や、禪宗やに緣が遠かつた許ではない、當時は孃樣藝を仕込むだけの餘裕のなかつたためでもあらう。

江戸時代になると、婦人の家庭教育の必須課目中に、繪事は無かつた。此の點から行くと、婦人の教育は萬事に於て平安朝の方が優れて居る。平安朝は女の勢力のある時代であつて、女の力によらなければ、藤原氏の名門も攝政關白たることを得なかつた。其娘を入内させて中宮にしたらば、父親は左團扇で暮される。其中宮に皇子が御生れなされば、それこそ占めたもので、氏の長者となり、攝政關白となり、一族は

榮えて、榮耀榮華が盡くされる。であるから女の勢力は偉大なもので、皇后中宮の周圍には才女名媛を集めて、互に競爭する姿であつた。從つて女の敎育にも多大の注意を拂つたものである。江戸時代になると、女にその樣な勢力が無い。女大學や其他の婦人敎育は凡て消極的であつたから、女は良妻賢母として成る可く縮小せられた敎育を受けた。また其敎育も一般に通俗を主としたから、繪畫の樣などちらかといへば稍々貴族的な敎育からは遠ざかつたものである。それ故江戸時代には、平安朝の樣な繪事敎育は、社會を通じて殆んど無かつた。たゞ除外例として學者や、文人詩人や、藝術家やの家庭では、往々此の敎育を施さなかつたでもない。谷文晁の

細君幹々は號を翠蘭といつて、山水花卉が得意であつたが、三十歳で夭折した。文晁の妹小香は畫く處頗る風韻に富んだと稱せられてゐる。其妹に紅藍があり、文晁の娘には橘々がある。池大雅の妻玉瀾は、祖母として梶女を有し、母として百合女を有してゐたから、先天的に文藝の素養がある。況や飄逸なる畫伯大雅に配したるに於てをや。從つて其畫く所も頗る風趣に富でゐる。篆刻家大島芙蓉の妻には蘿井女がある。花鳥を寫して淸人の風旨ありといはれてゐる。江馬蘭齋の女細香は詩書畫兼美の稱があつて、殊に墨竹の名手であつた。龜井元鳳の女小琴は詩と書とに巧であつたのみでなく、其寫す所の墨竹は甚だ瀟洒で、筆端に風を生ずるの趣がある。山

陽が其畫幅に題して、纖指尖邊龍影横、胸中有竹一揮成、匠心何似爺々苦、萬乘千枝逐次生と賛したのは、如何にも此女史の畫に應はしい。百々廣年の配照子、五十嵐華亭の妻もよ子、柴山老山の夫人菊子、山本北山の妻細桃、勾田臺嶺の配香夢、梁川星巖の配紅蘭、立原杏所の妹春莎などは、何れも其家庭が家庭なるだけに纖手よく丹青の技に長じてゐる。清原雪信女は狩野の脈を承け繼いだゝけに、此の派の中にあつては、一點紅であつた。其他織田瑟々、小栗雪蓬女といひ、三保ため、大倉袖蘭と云ひ、三上玉蓮といひ、同玉鶯、同玉琴といひ、片山いよ女といひ、巾幗者流の間にも少からず藝苑の花もあつたが、寧ろ婦人なるが故に珍とすべきもので、

一代を代表する者は勿論、藝術史上に相當の地位を占むべきものが一人だもあつたらうか。多くは奥様藝、孃様藝で藝術史とは殆んど沒交渉の姿である。

第二十七　心中

支那には心中が無いといふ事を唱ふる人があるが、必ずしも絶無ではない。既に漢の時代に廬江心中といふものがある。この事實は詩に於て傳はつて居るので、一篇の哀詩は事の顚末を明細に語つてゐる。漢末の建安年間に、廬江府の腰辨に焦中卿といふのがあつた。其妻劉氏は姑の爲に飽かぬ間の生木を裂かれて心ならずも里に還された。適々媒介する者があ

つて、家人は其の再醮を迫つた。けれども舊の夫を思うて忘れ得ない、此の可憐なる劉氏は依々戀々の情に堪へやらで、煩悶の末、遂に水に投じて死んだ。焦中卿も之を聞いて自ら庭樹に縊れて死んだ。流石に兩家でも之を不便と思つて、比翼塚を造り、華山の傍に合葬した。東西には松柏を植ゑ、左右には梧桐を植ゑた、枝と枝とは相掩ひ、葉と葉とは相交る、其中に鴛鴦が飛んでゐて、互に向き合つて啼いてゐた、行く人は足を駐めて聽き、寡婦は起つて彷徨すといふのが、此の詩の結末で、事柄が事柄だけで作者も味をやつてゐる。

此詩は千七百四十五字で、古今第一の長篇と云はれてゐる。作者は分らない。時人之を傷んで作つたといふ。我が國ならば、一つとやの讀み賣りか、芝居の外題になるところであるが、支那だけに詩と成つたのである。流石に漢末の詩だけあつて、蒼古の調があり、悲愴の中に溫厚の情が融々として搖曳してゐる。悲しんで傷らず、色を好んで淫せずといふのは詩經の本旨であつて、最も情的色彩を有すべき詩に於てさへも、よく情の奔放を押へて、中道に反るは、支那人の性質である。廬江小吏の心中は夫婦心中で、浮世の義理に迫られての上の覺悟から來たのである。互に穴隙を鑽つて忍び合ひ出來合つた揚句の果てに身を棄てたのではない。痴情の果に男は借金に苦しめられ、女は心に染まぬ男に落籍されようとするのを嫌がつて、どうせ此世で添はれぬとならば一蓮托生、

同じ蓮の臺を半分づゝ分けて坐らうなどゝ呑氣な考へから浮名を蜆川だの、網島だのに流したのとはてんから違ふ。儒教に育てられた支那心中は依然として支那の特色を持つてゐる。併し如何に特色を持つてゐた處が、竟畢情的行動に出でたもので、廬江心中の如きは支那にあつては珍といはねばならぬ。

支那の小説や戯曲の中にも心中物は見えぬ。情に依つて死んだものが情に依つて生きたといふ趣向は牡丹亭還魂記に見えてゐるが、情愛の極、相對死をしたといふのは、更に見出すことが出來ぬ。支那の小説や戯曲を見ると支那婦人の家庭内に於ける勢力は大したもので、決して男の壓抑を受けて小さくなつてゐるものではない。儒教に教へられた婦人だけに、

中々に節制の德があり、見識があり、文學の才があつて、男性に飜弄されるよりは、寧ろ男性より一段の高所に立つかの樣に見受けられる。併しこれは何れも智識階級に屬するものであるから、是を以て一般を推知する譯には行かぬ。

心中は日本の名物である。隨分舊い時から流行したもので、神功皇后が忍熊王を攻め給はんが爲に、小竹宮に御遷座あらせられた。其時天地晦冥にして晝も夜の如く、日々この樣な變が續いた。一老人あつて申すやう、かゝる怪しき事を阿豆那比の罪と申すと。其意味は如何なる事ぞと問へば、二社の神官が共に合葬されてゐるからであらうといふ。これを取調べると、小竹の神官と、天野の神官とは、生前睦じくあつた。

然るに小竹の神官が病死したれば、天野の神官は深く嘆いて、生きては交友たり、死して穴を同じうすることが無からうかとて、其の屍の傍で自殺をした。それで兩者を合葬したのであるとの事で、墓を發いて見ると其通りであつた。依りて別別に改葬した所が天日輝いて晝夜の別が出來た。これは男同士の心中で、阿豆那比の罪とは同性の戀のことであらうといはれてゐる。

允恭天皇の時に木梨輕太子は輕大郎女と不倫なる關係をしたゝめに、終に伊豫の國に流された。大郎女は太子戀しさに其の後を慕うて伊豫の國に行き、遂に兩人とも自害をなされた。是等は心中でも元祖の口である。尤も其以前に仁德天皇の時速總別王と女鳥王とが、天皇の御軍に追はれ逃げ出して、大和の倉椅山に上られた。其時に王が詠んだ歌、「梯立の倉椅山を嶮しみと、岩かきかねて我が手とらすも」、又の歌「梯立の倉椅山は嶮しけど妹と登れば嶮しくもあらず」。此の手放しの情歌には後人あてられるものが尠からぬ。やがて王は終に女王と與に殺された。これは自動的心中ではなくて、他動的心中の方に屬する。

女の勢力のあつた平安朝や、武士道の流行した鎌倉室町時代には、流石に心中などは歡迎もされず、實行も稀であつた。けれど心中の流行したのは云ふ迄もなく德川時代の事である。上方が流行の中